平成 26 年度

HITOTSUBASHI UNIVERSITY

よりよい一橋ライフのために

～学生生活調査とその分析

一橋大学 学生委員会

『よりよい一橋ライフのために
～学生生活調査とその分析』によせて

学生生活基本調査は、本学の学生がどのように勉学にとりくみ、どのように学生生活を送っているのかということについて、体系的にデータを蓄積し、分析するための調査です。この調査結果をその調査年次単位で分析することで、本学の学生たちが現状でどのような問題に直面しているのか、あるいは直面しうるのかということを考察することが可能になります。そのエビデンスに基づいて、問題の背後のメカニズムを考え、そのメカニズム理解に基づいて大学側の対応策を考えることが可能になります。さらにそれを時系列で追いかけていくことで、学生生活の変化のトレンドを確認し、その背後の原因を推測することも可能になります。単純な外挿法を用いることには問題がありますが、ある程度、背後のメカニズムを理解した上であれば、トレンドの予想も可能になります。その意味では、この調査を継続することで、その調査に答えてくれた学生たちの問題解決につながる施策を考えることができるばかりでなく、将来の学生たちが直面すると予想される問題の予防的な対策も可能になります。そのような貴重なデータの収集にご協力をいただいた先生方、また回答をしてくれた学生諸君に心から感謝します。

平成27年3月
一橋大学　学生委員会委員長
沼上　幹

CONTENTS

I 基本事項について 学部生 大学院生 2

II 住居・通学について 学部生 大学院生 3

III 生活時間について 学部生 大学院生 4

IV 授業やゼミについて 学部生 6

V 授業やゼミについて 大学院生 13

VI 学生生活について 学部生 大学院生 20

VII 大学が行なっている各種の支援について 学部生 大学院生 23

VIII 経済的な状況について 学部生 大学院生 27

IX 進路計画について 学部生 30

X 進路計画について 大学院生 31

編集後記 33

Ⅰ 基本事項について

学部生
大学院生

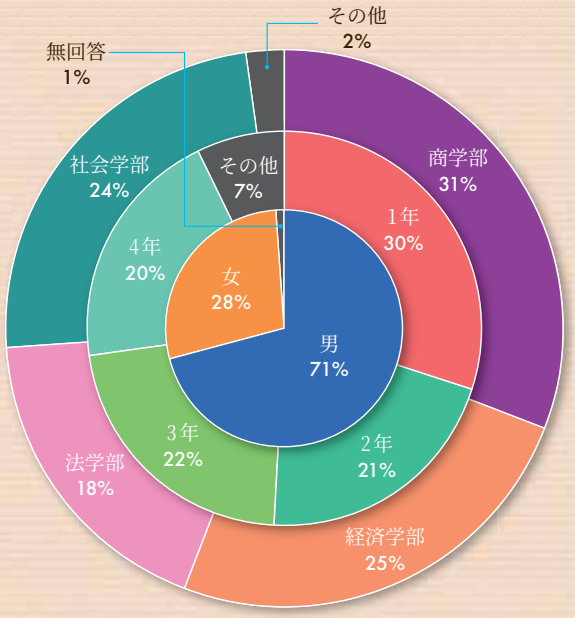
学生生活の実態を把握し、今後の支援のあり方を検討するため、学部及び大学院に在籍する学生（休学・留学中を除く）を対象に、平成26年11月に『平成26年度学生生活調査』を実施しました。今回の調査は5度目です。前回は平成25年度に実施しました。

回答を寄せてくれた学生は、学部生4,456人中2,223人（回収率49.9％）、大学院生1,926人中333名（回収率17.3％）で、全体では6,382人中2,556名（回収率40.1％）の学生から回答が得られました[図表Ⅰ-1]。これは前回調査（平成25年度）の回収率（学部生35.7％、大学院生29.3％、全体34.0％）をさらに上回ることができました。前回調査は回収率を上げるために設問数を削減し、ゼミを通じて回答を促すなどの工夫が功を奏し、回収率が高まりました。今後も回収率を高めるための工夫を続けます。

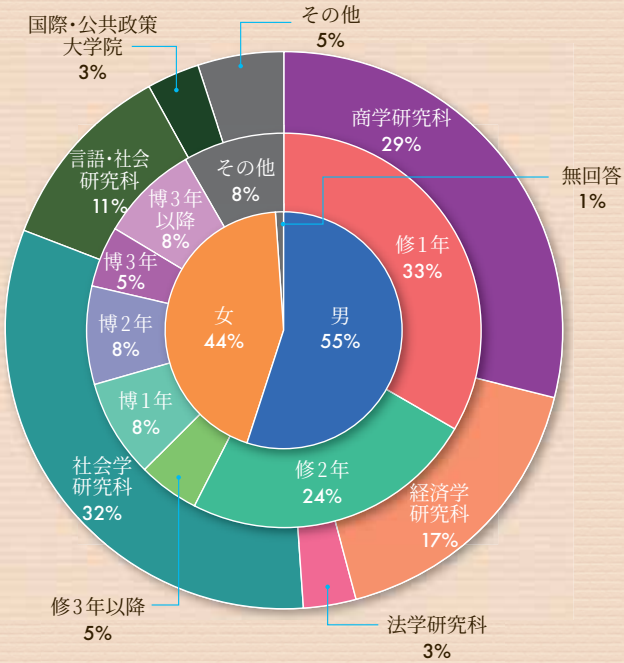
図表Ⅰ-1 回収率 全体 学部生 大学院生

	対象総数（人）	回収数（人）	回収率（%）
学部生	4,456人	2,223人	49.9％
大学院生	1,926人	333人	17.3％
全体（合計）	6,382人	2,556人	40.1％

図表Ⅰ-2 回答学生の内訳 学部生



図表Ⅰ-3 回答学生の内訳 大学院生



回答を寄せてくれた学生の内訳は[図表Ⅰ-2（学部生）]および[図表Ⅰ-3（大学院生）]の通りです。

学部生については、4つの学部の間にあまり大きな差はありません。1年生の回答が多くなってはいますが、概ね各学年から均等に回答を得ています。性別は、男性71％・女性28％・無回答1％となっており、これは在籍学生の男女比（男子71.1％、女子27.9％）とほぼ同じです。ちなみに外国人留学生は回答者全体の約4.3％（学部生の在籍留学生の割合は約4.24％）です。

大学院生については、研究科によって回答率に差が見受けられました。また、外国人留学生※1は回答の28.8％を占めており、本調査は外国人留学生の状況や意見を知るための優れた資料にもなっています。

※1　この場合の「外国人留学生」とは、在籍資格が「留学」であることです。

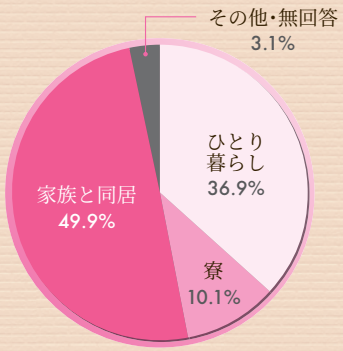
II 住居・通学について

学部生
大学院生

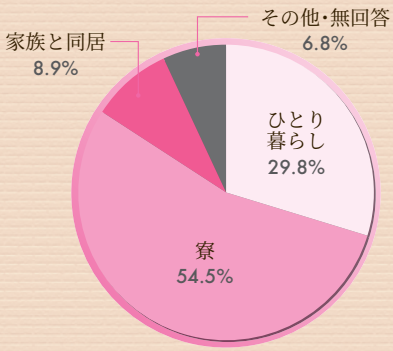
住居に関しては、学部生の場合は自宅外が45.4％（寮8.1％、ひとり暮らし37.3％）、家族と同居している学生が45.2％となっているのに対し、大学院生は自宅外が57.9％（寮23.7％、ひとり暮らし34.2％）、家族と同居する者が37.5％と自宅生の比率がより低 いことがわかります。寮に住む割合が学部生よりもやや高い点も、大学院生の特徴です[図表 II -1]。

以上は全体の集計にみられる特徴です。留学生のみを集計すると学部生は自宅外が86.4％（寮61.1％、ひとり暮らし25.3％）、大学院生は82.3％（寮47.9％、ひとり暮らし34.4％）と自宅外生の比率がより高くなります[図表 II -2]。

図表 II -1 住居形態 学部生 大学院生

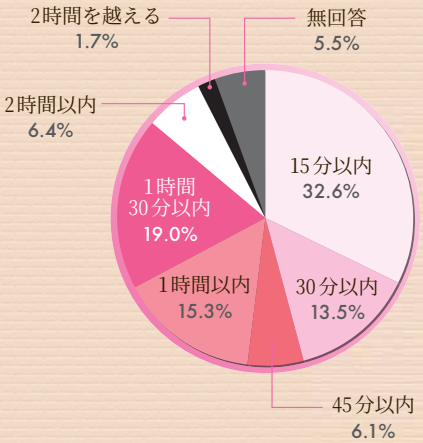


図表 II -2 住居形態 留学生のみ

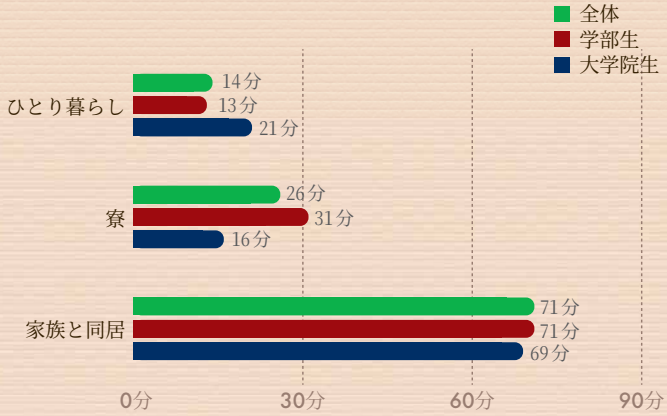


通学時間では、片道15分以内と答えたのは32.6％（学部生32.1％、大学院生35.7％）で、30分以内と回答した学生とあわせると全体の46.1％となり、4割強の学生が比較的大学に近い圏内に暮らしていることがわかります[図表 II -3]。ただし、住居形態別に平均通学時間をみますと、回答者の半数を占める、家族と同居する学生は平均1時間11分かけて通学しているようです[図表 II -4]。

図表 II -3 片道の所要通学時間 学部生 大学院生



図表 II -4 片道の所要通学時間 全体 学部生 大学院生



通学に利用する交通機関は[鉄道]が最も多く54.5％（学部生55.4％、大学院生48.3％）、次に[自転車]が37.5％（学部生、38.8％、大学院生28.8％）であり、[徒歩のみ]が8.5％ [学部6.5％、大学院22.2％]でした。バスの利用者は全体で2.6％とわずかです。

III 生活時間について

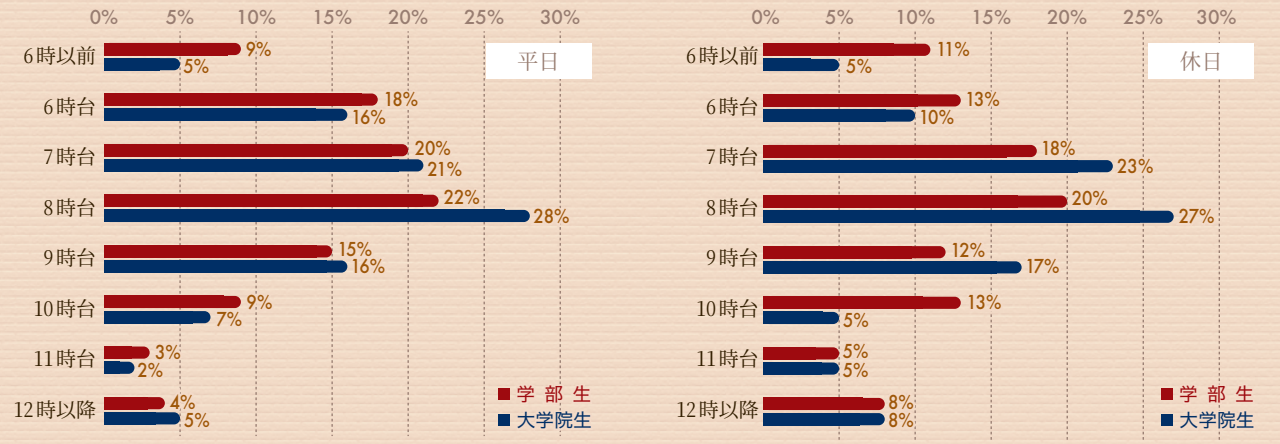
学部生
大学院生

通学頻度や生活時間などの質問にあたって、「一週間あたりの」とは聞かず、前回の調査と同様に「昨日の」と特定して尋ねました。それによって、回答者が自分の生活を正確に振り返ることができます。また、平日と休日の違いも回答に反映されるという利点もあります。

調査時点の前日が平日であったとする回答は全体の78.8％で、休日（土・日）であったのは20.0％と、平日と休日の比率は実際の曜日のそれに近いバランスのとれた結果となっています。残りの1.2％に相当する回答は、昨日の日付・曜日が空欄でした。以後は、これらを平日についてのものに含めて集計します［図表III-1］。

11月24日（月）は勤労感謝の日の振替休日となっていますが、本学では授業日でしたので、平日として扱っています（該当回答6票）。

図表III-1 「昨日の」（調査時点の前日の）起床時刻 学部生 大学院生



回答者の約半数は、平日の起床時刻が6時～8時の間であると答えています［図表III-2］。就寝時刻との差をとることで平日の睡眠時間をおおまかに推測すると、学部生と大学院生それぞれ、平均して6時間46分および6時間54分となりました。

朝食に関する質問については、回答者の約8割が平日に朝食をとったと答えています［図表III-3］。朝食をとらなかった学生と平均起床時刻を比較してみると、約1時間の差があり、特に学部生では朝食をとらなかったと答えた学生の平均起床時刻は1時間19分遅いという結果になりました。朝食をとる時間をすぎても寝ている、あるいは講義開始ぎりぎりまで寝ているようです。

大学に来ていた学生の割合を集計すると、次のようになります［図表III-4］。昨日が平日であった回答者のうち、そのときに大学に来ていたと回答する割合は6～7割で、3～4割の学生は大学に来ていません。休日については約2割は大学にいたと回答しており、勉学・研究のため、あるいは課外活動のために通学している学生たちが少なからずいるようです。

図表III-2 平均起床時刻 学部生 大学院生

	学部生	大学院生
平日	7:59	7:58
休日	8:17	8:34

図表III-3 平日の朝食および起床について 学部生 大学院生

	学部生		大学院生	
	割合	平均起床時刻	割合	平均起床時刻
朝食をとった	77.7％	7:39	79.0％	7:48
朝食をとらなかった	22.3％	9:08	21.0％	8:35

図表III-4 「大学に来ていた」という回答の割合 学部生 大学院生

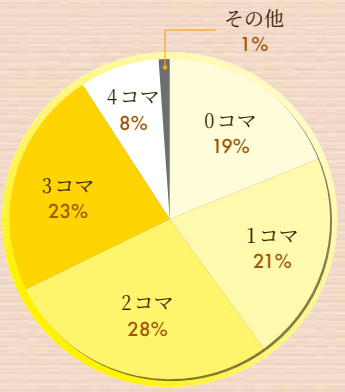
	学部生	大学院生
平日	71.9％	63.7％
休日	18.9％	22.2％

平日に大学に来た学部生は、81.5％が午前中に大学に到着しています。大学を出た時間との差で大学内滞在時間を推計すると、6時間54分でした。また、平日に大学に来た学部生の6人に1人くらいは19時以降も大学内にいたという結果になっています。

さらに、平日の学部生の講義の履修および出席について回答を求めたところ、平均1.86コマ（講義）を履修していることがわかりました。円グラフに示されているように、履修コマ数の分布は概ね均等です［図表Ⅲ-5］。

履修している講義の数と、実際に出席した講義の数を比較することで計算される講義出席率は全体で77.8％でした。1・2・3コマ履修の場合は出席率は概ね75％前後ですが、4コマを履修している学生の出席率は83.5％と高くなっています。

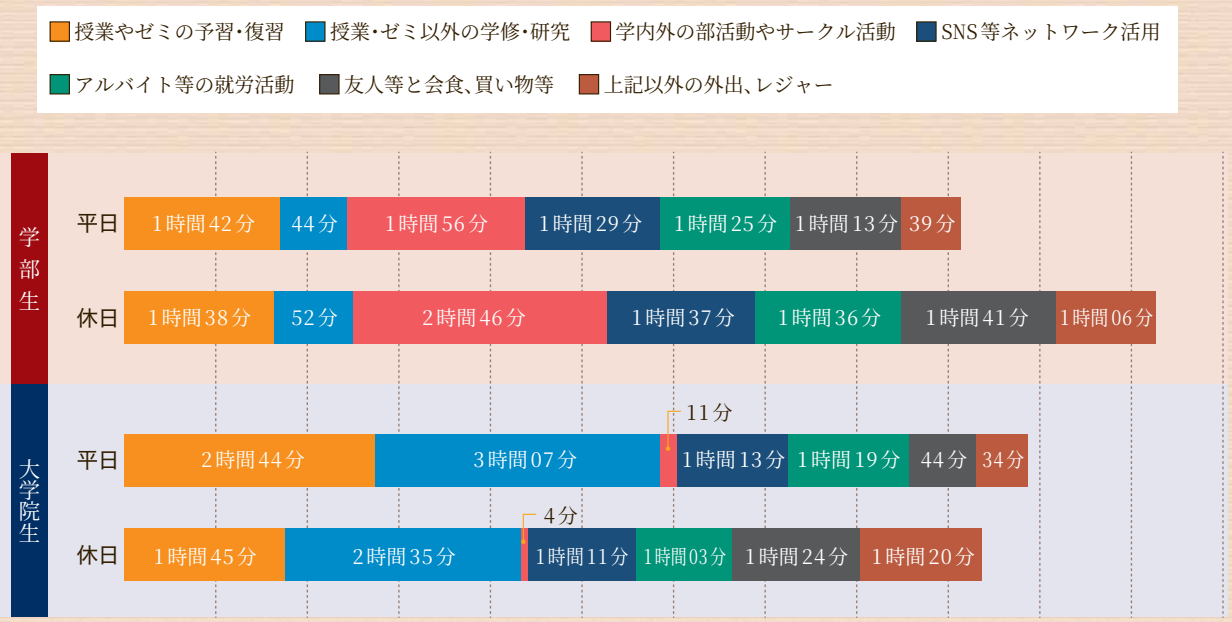
図表Ⅲ-5　平日の履修コマ数　学部生



時間の使いかたについて、7項目についてそれぞれ過ごした時間の長さを回答してもらいました［図表Ⅲ-6］）。平均値をみると、学部生は1日あたり約1時間40分は予復習の時間をとったと回答しています。また、「学部生平日（学部生休日）」の回答者の42.2％（51.0％）は、予習復習にあてた時間が1時間未満であるか無回答であり、必ずしも全員が毎日のように1日1時間程度の学習をしているわけではありません。

また、学部生が休日に部活動・サークル活動に平均して2時間46分を費やしたという結果になっていますが、学部生休日の回答者の53.7％は、この活動に使った時間は1時間未満あるいは無回答になっています。学生の福利を考える際には、このような生活実態の個人差を想定する必要があります。

図表Ⅲ-6　平日と休日の活動時間の内訳　学部生　大学院生

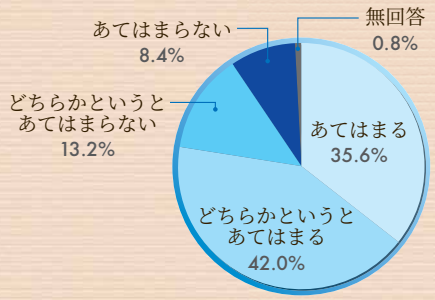


IV 授業やゼミについて

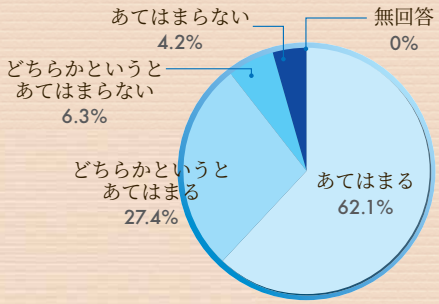
学部生

「履修登録した授業には必ず出席している」との問いに対し、「あてはまる」が35.6％、「どちらかというとあてはまる」が42.0％で、合計すると77.6％となりました[図表IV-1]。これを留学生に限ると、「あてはまる」が62.1％、「どちらかというとあてはまる」が27.4％で、合計すると89.5％となり、留学生の方が勉学意欲が高いことが読み取れます[図表IV-2]。

図表IV-1 履修登録した授業には必ず出席している 学部生全体

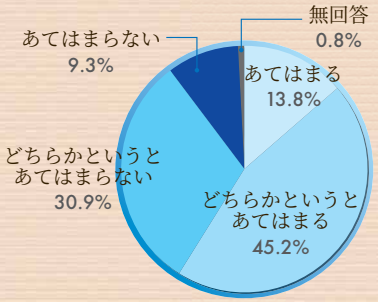


図表IV-2 履修登録した授業には必ず出席している 留学生のみ

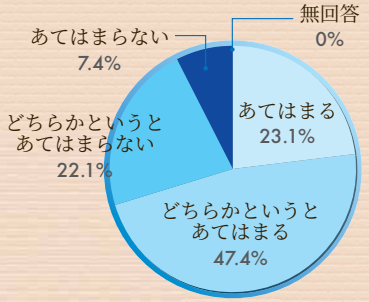


「授業内容は興味がわくものが多い」との問いに対し、「あてはまる」「どちらかというとあてはまる」が59％と半数を超えますが、「あてはまらない」「どちらかというとあてはまらない」も40.2％います[図表IV-3]。この傾向は留学生に限ると、「あてはまる」「どちらかというとあてはまる」が70.5％となり、留学生の方が授業内容を興味深いと感じていることが分かります[図表IV-4]。

図表IV-3 授業は興味がわくものが多い 学部生全体

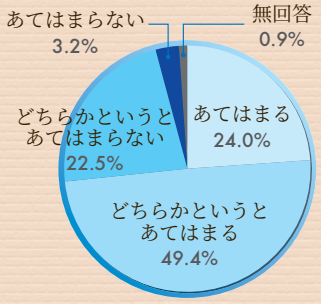


図表IV-4 授業は興味がわくものが多い 留学生のみ

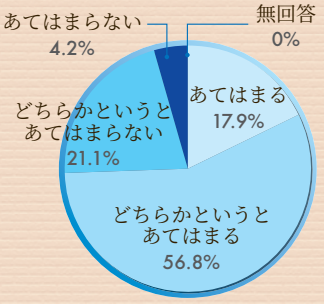


「授業内容が難しいと思うことがある」との問いに対し、「あてはまる」24％、「どちらかというとあてはまる」が49.4％で、合計すると73.4％と高い割合でした[図表IV-5]。これを留学生に限ってもその傾向は変わりません[図表IV-6]。

図表IV-5 授業が難しいと思うことがある 学部生全体

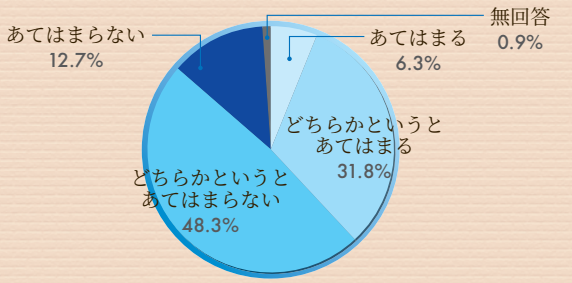


図表IV-6 授業が難しいと思うことがある 留学生のみ

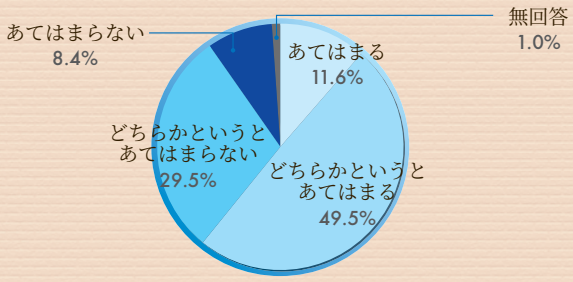


「専門科目の基礎的知識は足りている」という問いに対し、「あてはまる」6.3％、「どちらかというとあてはまる」が31.8％で、合計すると38.1％となりました[図表Ⅳ-7]。留学生に限ると、「あてはまる」が11.6％、「どちらかというとあてはまる」が49.5％で、合計すると61.1％となり、留学生の方が、基礎知識に自信を持っているといえます[図表Ⅳ-8]。

図表Ⅳ-7　専門科目の基礎知識は足りている　学部生全体

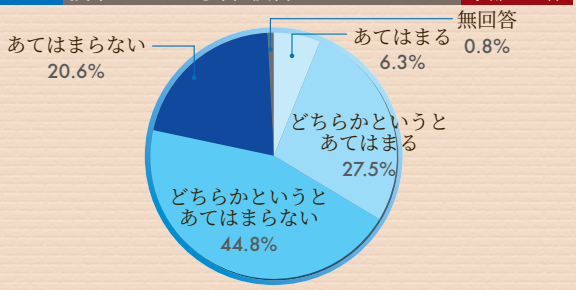


図表Ⅳ-8　専門科目の基礎知識は足りている　留学生のみ

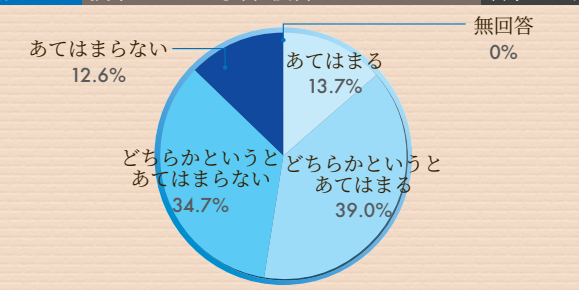


「授業のための予習・復習はしている」という問いに対し、「あてはまる」が6.3％、「どちらかというとあてはまる」が27.5％で、合計すると33.8％にとどまりました[図表Ⅳ-9]。これを留学生に限ると、「あてはまる」が13.7％、「どちらかというとあてはまる」が39.0％で合計52.7％となりました[図表Ⅳ-10]。日本人学生よりも留学生の方が自律的に学習している姿勢がうかがえます。

図表Ⅳ-9　授業のための予習・復習はしている　学部生全体

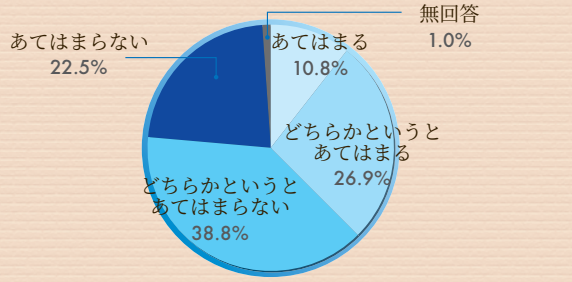


図表Ⅳ-10　授業のための予習・復習はしている　留学生のみ

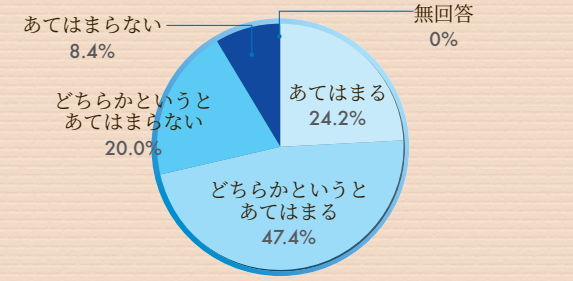


「語学能力が足りている」という問いに対し、「あてはまる」が10.8％、「どちらかというとあてはまる」が26.9％で、合計すると37.7％となりました[図表Ⅳ-11]。これを留学生に限ると、「あてはまる」が24.2％、「どちらかというとあてはまる」が47.4％で、合計71.6％となりました。留学生の方が語学能力に自信のある者が多いことが分かります[図表Ⅳ-12]。

図表Ⅳ-11　語学能力が足りている　学部生全体

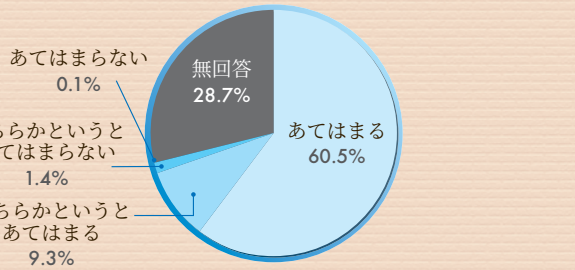


図表Ⅳ-12　語学能力が足りている　留学生のみ

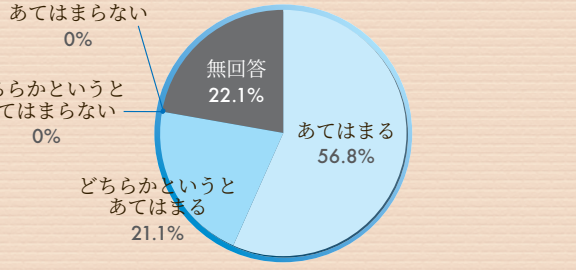


「ゼミは必ず出席している」との問いに対し、「あてはまる」が60.5％、「どちらかというとあてはまる」が9.3％で、合計すると69.8％となりました[図表Ⅳ-13]。これを留学生に限ってもその傾向は変わりません[図表Ⅳ-14]。ただし、無回答が28.7％と他の質問に比べて多いことから、3年からの後期ゼミに参加する以前の1・2年生が全体数に含まれると推測されます。そこで、これを除いて再計算すると、「あてはまる」「どちらかといえば当てはまる」の合計は97.9％となり、こちらが実態に近いと思われます。

図表Ⅳ-13　ゼミは必ず出席している　学部生全体

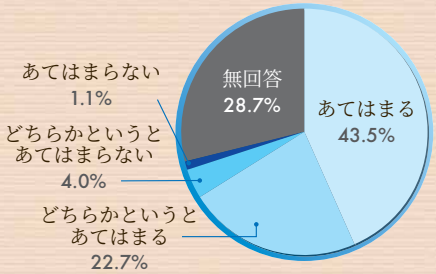


図表Ⅳ-14　ゼミは必ず出席している　留学生のみ

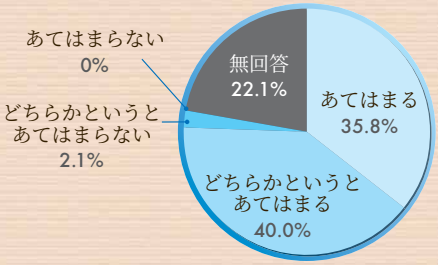


「ゼミの内容は興味深い」との問いに対し、「あてはまる」が43.5％、「どちらかというとあてはまる」と回答した者が22.7％で、合計すると66.2％となります[図表Ⅳ-15]。これを留学生に限ると、「あてはまる」が35.8％、「どちらかというとあてはまる」が40.0％で合計75.8％となります[図表Ⅳ-16]。上記と同じく、無回答を除いて再計算すると92.9％となり、ゼミに対して相当程度満足していると推測されます。

図表Ⅳ-15　ゼミの内容は興味深い　学部生全体

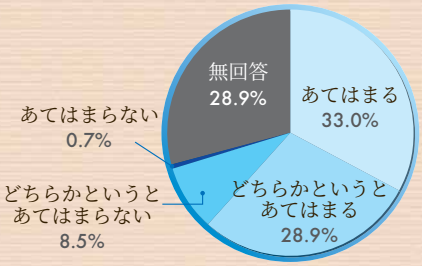


図表Ⅳ-16　ゼミの内容は興味深い　留学生のみ

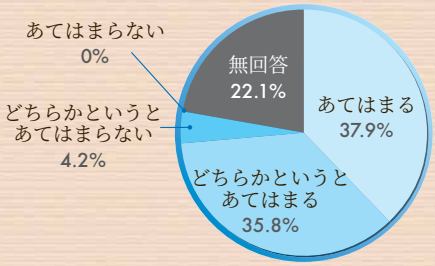


「ゼミでの発表の準備に十分時間を使っている」との問いに対し、「あてはまる」が33.0％、「どちらかというとあてはまる」が28.9％で、合計すると61.9％となります[図表Ⅳ-17]。留学生に限ると、「あてはまる」が37.9％、「どちらかというとあてはまる」が35.8％で、合計では73.7％となります[図表Ⅳ-18]。無回答を除外して回答すると、87.1％となり、ゼミに対して多くの学生が真摯に取り組んでいることがわかります。

図表Ⅳ-17　ゼミでの発表の準備に十分時間を使っている　学部生全体

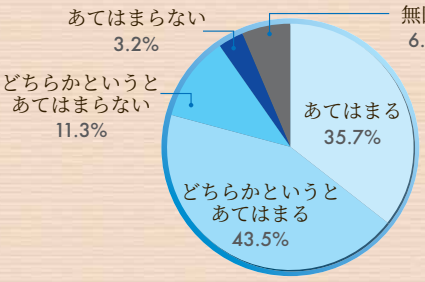


図表Ⅳ-18　ゼミでの発表の準備に十分時間を使っている　留学生のみ

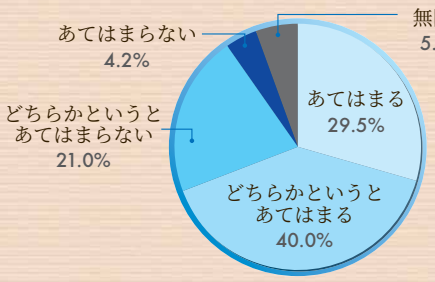


「授業やゼミでの人間関係になじめている」との問いに対し、「あてはまる」が35.7％、「どちらかといえばあてはまる」が43.5％で、合計すると79.2％となりました[図表Ⅳ-19]。一方、なじめていない学生（「どちらかというとあてはまらない」＋「あてはまらない」）は約15％です。この割合は、留学生に限定すると25％を超え、留学生の方がなじめていない学生が多いようです。[図表Ⅳ-20]。

図表Ⅳ-19　授業やゼミでの人間関係になじめている　学部生全体

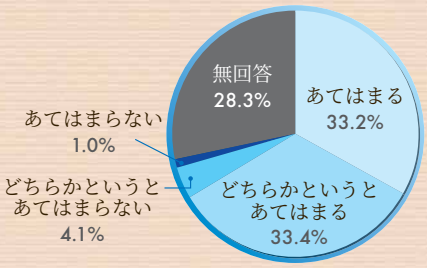


図表Ⅳ-20　授業やゼミでの人間関係になじめている　留学生のみ

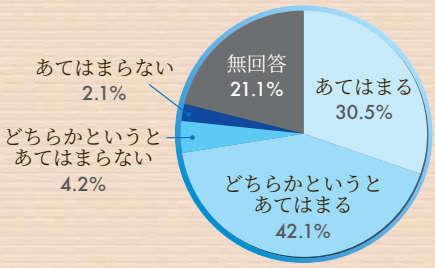


「指導教員との関係がうまくいっている」との問いに対し、「あてはまる」が33.2％、「どちらかといえばあてはまる」が33.4％で、合計すると66.6％となりました[図表Ⅳ-21]。留学生に限定すると、「あてはまる」と回答した者が30.5％、「どちらかといえばあてはまる」と回答した者が42.1％で、合計すると72.6％となります[図表Ⅳ-22]。

図表Ⅳ-21　指導教員との関係がうまくいっている　学部生全体

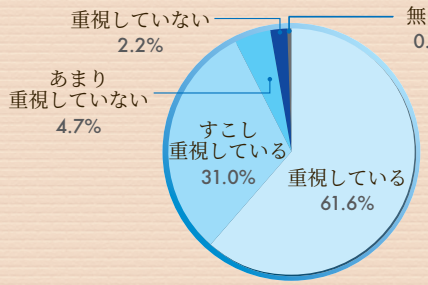


図表Ⅳ-22　指導教員との関係がうまくいっている　留学生のみ

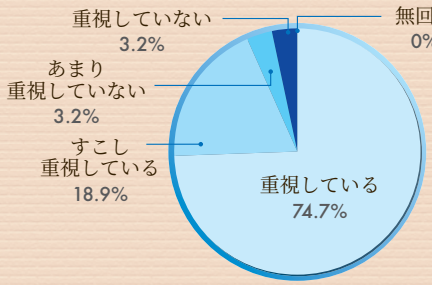


授業を履修・聴講する際に「授業内容に対する興味」を「重視している」と回答した学生は61.6％、「すこし重視している」と回答した学生は31.0％で、合計で92.6％となりました[図表Ⅳ-23]。留学生に限定した場合もこの傾向は変わりません[図表Ⅳ-24]。

図表Ⅳ-23　授業内容に対する興味　学部生全体

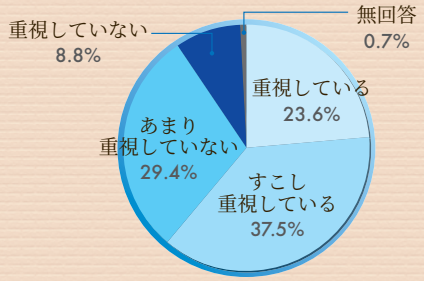


図表Ⅳ-24　授業内容に対する興味　留学生のみ

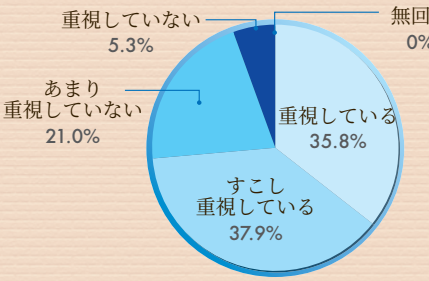


授業を履修・聴講する際に「自分の研究に役立てる」を「重視している」と回答した学生は23.6％、「すこし重視している」と回答した学生は37.5％で、合計で61.1％となりました[図表Ⅳ-25]。留学生に限定した場合、「重視している」と回答した学生が35.8％、「すこし重視している」と回答した学生が37.9％で、合計で73.7％となり[図表Ⅳ-26]、日本人学生よりも留学生の方が授業履修・聴講にあたって、自分の研究に役立てるということを意識していることがうかがえます。

図表Ⅳ-25　自分の研究に役立てる　学部生全体

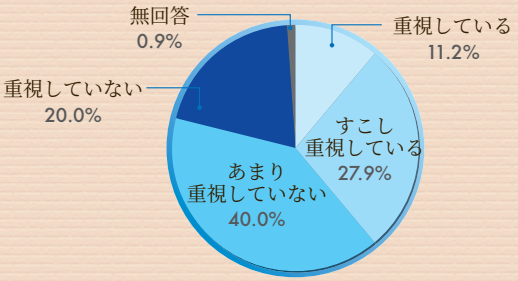


図表Ⅳ-26　自分の研究に役立てる　留学生のみ

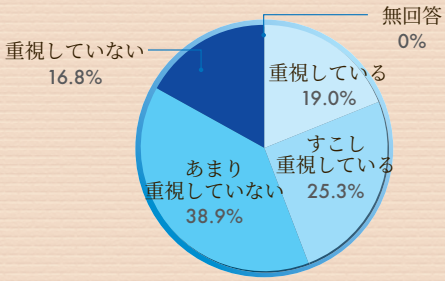


授業を履修・聴講する際に「就職に役立てる」を「重視している」と回答した学生は11.2％、「すこし重視している」と回答した学生は27.9％で、合計で39.1％となりました[図表Ⅳ-27]。留学生に限定した場合もこの傾向は変わりません[図表Ⅳ-28]。授業選択に関して、就職に役立つかどうかは大きな決定要因とはなっていないことがうかがえます。

図表Ⅳ-27　就職に役立てる　学部生全体

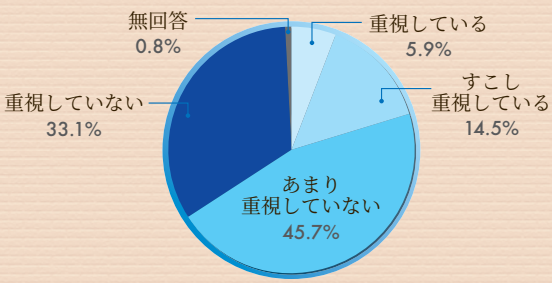


図表Ⅳ-28　就職に役立てる　留学生のみ

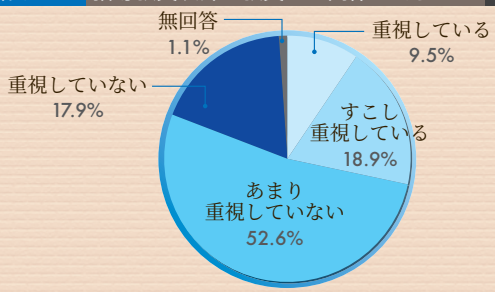


授業を履修・聴講する際に「指導教員以外の教員との関係づくり」を「重視している」と回答した学生は5.9％、「すこし重視している」と回答した学生は14.5％で、合計で20.4％となり、約8割の学生は指導教員以外の教員との関係づくりを意識していないことが分かります[図表Ⅳ-29]。一方、留学生に限定すると、「重視している」と回答した学生が9.5％、「すこし重視している」と回答した者が18.9％で、合計で28.4％となり、どちらかというと留学生の方が指導教員以外の教員との関係づくりを意識して授業を履修・聴講していることが分かります[図表Ⅳ-30]。

図表Ⅳ-29　指導教員以外の教員との関係づくり　学部生全体

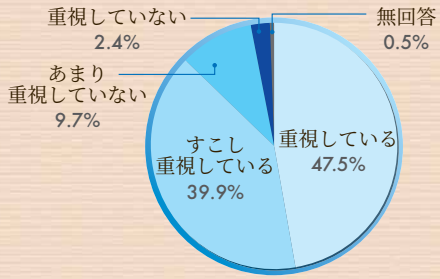


図表Ⅳ-30　指導教員以外の教員との関係づくり　留学生のみ

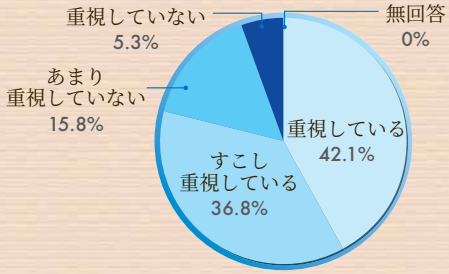


授業を履修・聴講する際に「単位の取りやすさ」を「重視している」と回答した学生は47.5％、「すこし重視している」と回答した学生は39.9％で、合計で87.4％を占めました[図表Ⅳ-31]。留学生に限定すると、「重視している」と回答した学生は42.1％、「すこし重視している」と回答した学生は36.8％で、合計で78.9％となりました[図表Ⅳ-32]。どちらかというと日本人の方が単位の取りやすさを意識して授業を履修・聴講していることが分かります。

図表Ⅳ-31　単位の取りやすさ　学部生全体

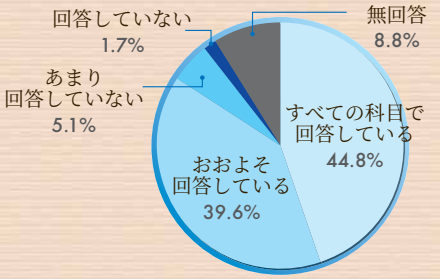


図表Ⅳ-32　単位の取りやすさ　留学生のみ

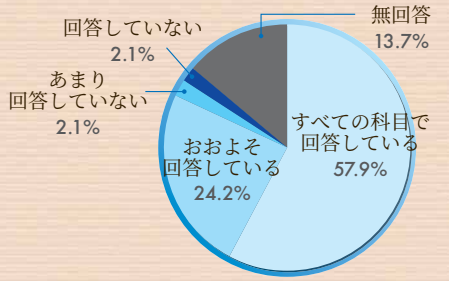


「履修科目の授業アンケートに回答していますか」との問いに対し、「すべての科目で回答している」が44.8％、「おおよそ回答している」が39.6％で、合計すると84.4％となりました[図表Ⅳ-33]。留学生に限定した場合もこの傾向は変わりません[図表Ⅳ-34]。自由記述では、「学生の評価を届けるよい機会である」、「教員を研究面からだけでなく教育面から評価するために必要である」という肯定的な意見がある一方、「形式的になっているのではないか」、「本当に授業改善に役立っているのかわからない」などの意見も見られ、授業アンケートの有効活用が求められているといえます。

図表Ⅳ-33　履修科目の授業アンケートの回答　学部生全体



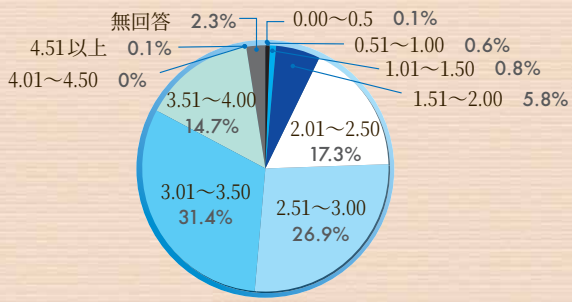
図表Ⅳ-34　履修科目の授業アンケートの回答　留学生のみ



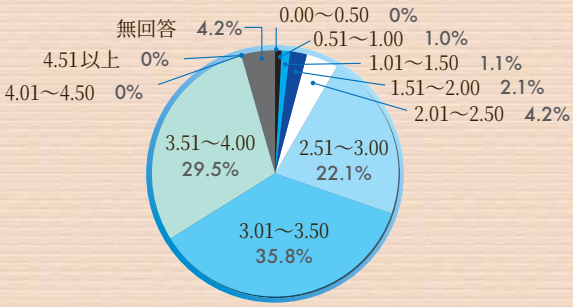
GPAの分布は、[図表Ⅳ-35]に示す通りです。GPAが2.0から2.5の学生が17.3％、2.5から3.0の学生が26.9％、3.0から3.5の学生が31.4％で、3.5から4.0の学生が14.7％と、これらの学生が全体の約9割を占めます。残りの約7％はGPAが2に届きませんでした。

対象を留学生に限ると、GPAが2.5から3.0が22.1％、3.0から3.5が35.8％、3.5から4.0が29.5％と、かなり高いことがわかります[図表Ⅳ-36]。項目[図表Ⅳ-38][図表Ⅳ-40]で明らかにされているように、留学生の方がGPAへの影響を考慮にいれた履修選択を行い、好成績を確保し、GPAを上げる努力をしていると推測されます。

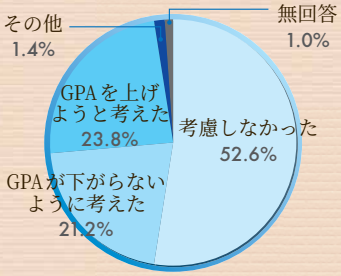
図表Ⅳ-35　先学期末までの通算GPA　学部生全体



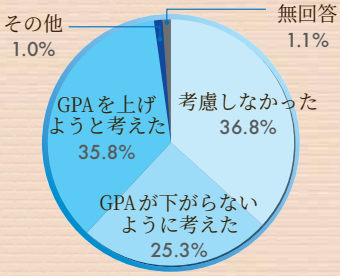
図表Ⅳ-36　先学期末までの通算GPA　留学生のみ



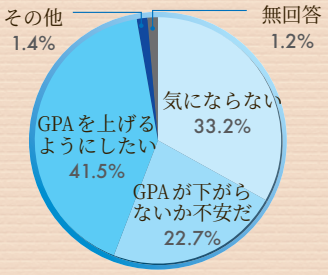
図表Ⅳ-37　今学期の履修科目を決める際のGPAの考慮の有無　学部生全体



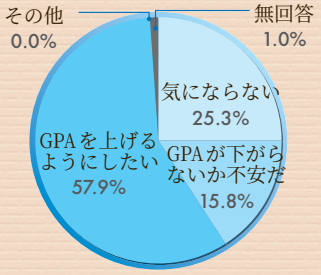
図表Ⅳ-38　今学期の履修科目を決める際のGPAの考慮の有無　留学生のみ



図表Ⅳ-39　自分のGPAが気になりますか　学部生全体



図表Ⅳ-40　自分のGPAが気になりますか　留学生のみ

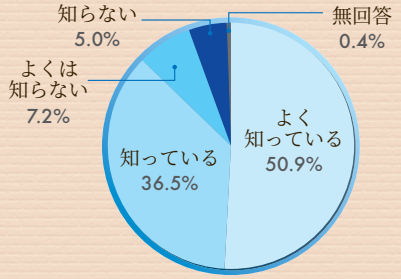


自由記述欄ではGPA制度に対するさまざまな意見が書かれました。肯定的な意見としては、「成績が数字ではっきり表されるとやる気の向上につながる」、「今後の学習活動の参考になる」などがありました。一方、否定的な意見としては、「教員によって評価基準が異なり、公平性に欠ける」、「GPAのために単位取得の容易な科目ばかりとってしまう」などがありました。

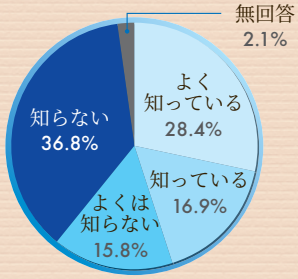
履修キャップ制について、「よく知っている」が50.9％、「知っている」が36.5％で、合計87.4％となり、多くの学生に周知されている実態が明らかになりました[図表Ⅳ-41]。ただし、これを留学生に限定すると、「よく知っている」が28.4％、「知っている」が16.9％で、合計45.3％となり[図表Ⅳ-42]、基本的かつ重要な事項でありながら十分には知られていない実態が浮かび上がります。

自由記述欄を見ると、「キャップ制の意義がわからない」といった記述が多く見られました。「履修講義数を制限することにより、各教科をじっくり学んでもらう」というキャップ制の意義への理解はそれほど進んでいないようです。

図表Ⅳ-41　履修キャップ制　学部生全体

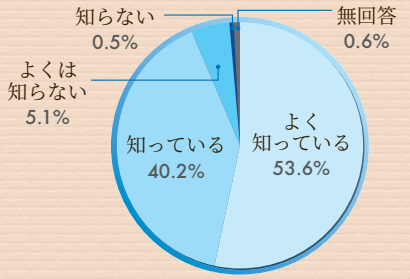


図表Ⅳ-42　履修キャップ制　留学生のみ

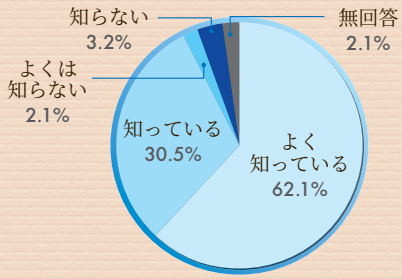


履修科目登録確認について、「よく知っている」が53.6％、「知っている」が40.2％で、合計すると93.8％となり[図表Ⅳ-43]、ほとんどの学生に認知されていることが分かりました。この傾向は、留学生に限定しても変わりません[図表Ⅳ-44]。

図表Ⅳ-43　履修科目登録確認　学部生全体

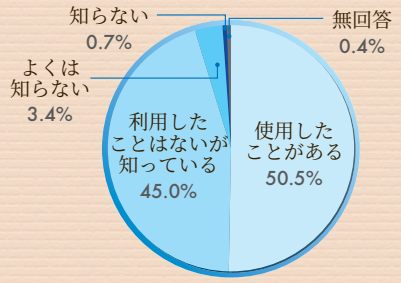


図表Ⅳ-44　履修科目登録確認　留学生のみ

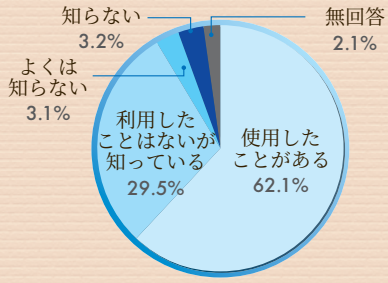


履修撤回制度の利用経験者は、全体で見れば50.5％ですが[図表Ⅳ-45]、留学生に限れば62.1％と、留学生の利用がかなり多いことが分かります[図表Ⅳ-46]。自由記述欄では、「履修撤回制度とキャップ制の並存による弊害が大きい。履修撤回した科目はキャップ制から外してほしい」などの意見がありました。

図表Ⅳ-45　履修撤回　学部生全体

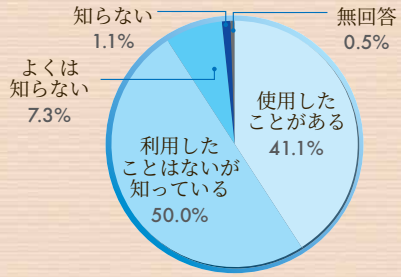


図表Ⅳ-46　履修撤回　留学生のみ

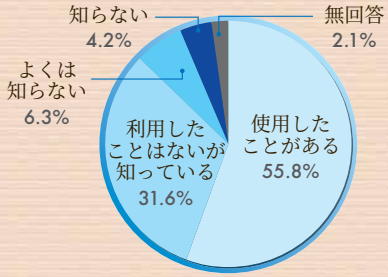


上書き再履修の利用経験者も、全体で見れば41.1％ですが[図表Ⅳ-47]、留学生に限れば55.8％と、留学生の利用がかなり多いことが分かります[図表Ⅳ-48]。自由記述欄では、「年によって開講する時間帯が変わると、上書きする際に履修できないことがあって困る」などの意見がありました。

図表Ⅳ-47　上書き再履修　学部生全体

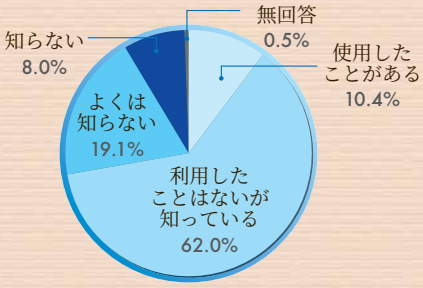


図表Ⅳ-48　上書き再履修　留学生のみ

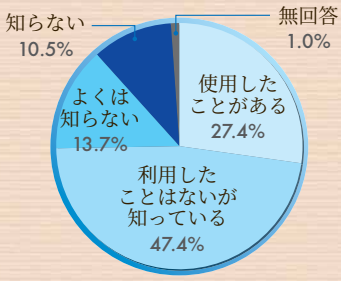


成績説明請求制度の利用経験者も、全体で見れば10.4％ですが[図表Ⅳ-49]、留学生に限れば27.4％と、留学生の利用がかなり多いことが分かります[図表Ⅳ-50]。自由記述欄では、「請求するにはハードルが高く、難しい」、「時間がかかる」、「先生が不愉快だと言っているのを聞くと躊躇してしまう」などの意見がありました。

図表Ⅳ-49　成績説明請求制度　学部生全体



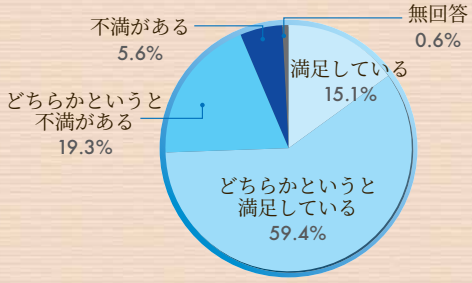
図表Ⅳ-50　成績説明請求制度　留学生のみ



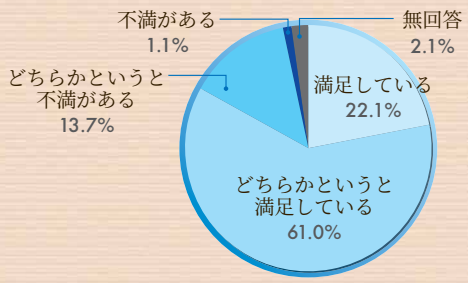
そのほか、自由記述欄では、「履修登録の期間をもっと長くしてほしい」、「電算抽選の科目もオリエンテーション後に抽選してほしい」、「試験やレポートを返却してほしい」、「成績評価の基準を明確に示してほしい」、「成績発表が遅い」、などがありました。

「一橋大学の教育システム（カリキュラムや各種制度）に満足していますか」との問いに対し、「満足している」が15.1％、「どちらかというと満足している」が59.4％で、合計すると74.5％となりました[図表Ⅳ-51]。留学生だけに限定すると、「満足している」が22.1％、「どちらかというと満足している」が61.0％で、合計すると83.1％となり、日本人学生以上に一橋大学の教育システムに対する満足度が高いことが明らかとなりました[図表Ⅳ-52]。

図表Ⅳ-51　満足度：一橋大学の教育システム　学部生全体

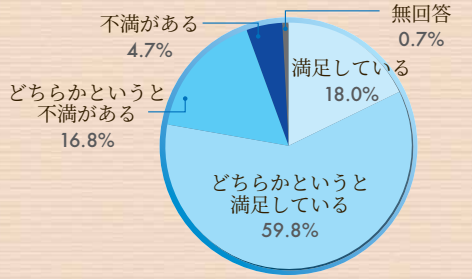


図表Ⅳ-52　満足度：一橋大学の教育システム　留学生のみ

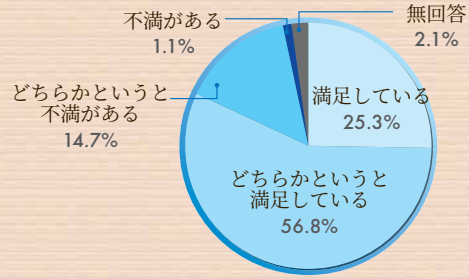


一橋大学の教育について、「一橋大学で受けている教育内容に満足していますか」との問いに対し、「満足している」が18.0％、「どちらかというと満足している」が59.8％で、合計すると77.8％となりました[図表Ⅳ-53]。留学生だけに限定すると、「満足している」が25.3％、「どちらかというと満足している」が56.8％で、合計すると82.1％となり[図表Ⅳ-54]、一橋大学で受けている教育内容に対する満足度は全体的に高いことが明らかとなりました。

図表Ⅳ-53　満足度：一橋大学で受けている教育内容　学部生全体



図表Ⅳ-54　満足度：一橋大学で受けている教育内容　留学生のみ

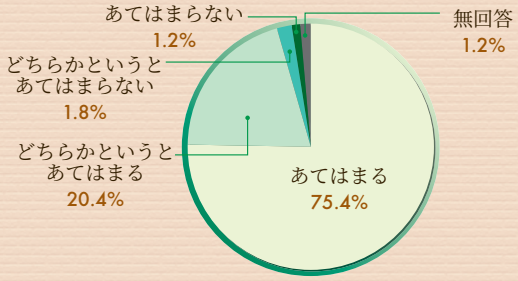


V 授業やゼミについて

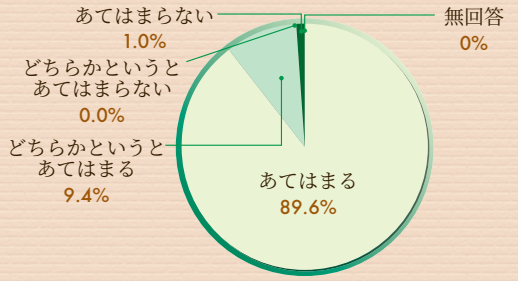
大学院生

「履修登録した授業には必ず出席している」との問いに対し、「あてはまる」と回答した者が75.4％、「どちらかというとあてはまる」と回答した者が20.4％で、合計すると95.8％と学部生に比べて明らかに高い数字になりました[図表Ⅴ-1]。留学生に限るとその傾向は強まり、「あてはまる」と回答した者が89.6％、「どちらかというとあてはまる」と回答した者が9.4％となります。留学生の方がより積極的に授業に出席しています[図表院留Ⅴ-2]。

図表Ⅴ-1 履修登録した授業には必ず出席している 大学院生全体

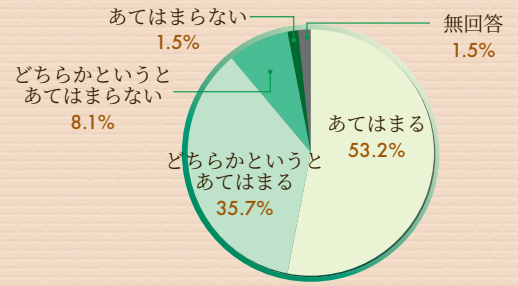


図表Ⅴ-2 履修登録した授業には必ず出席している 留学生のみ

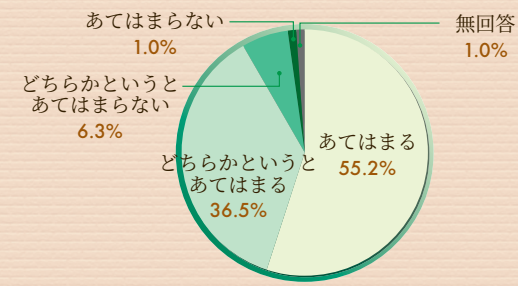


「授業内容は興味がわくものが多い」との問いに対し、「あてはまる」と回答した者が53.2％、「どちらかというとあてはまる」と回答した者が35.7％で、合計すると88.9％と学部生に比べて明らかに高い数字になりました[図表院全Ⅴ-3]。留学生に限るとその傾向は強まり、「あてはまる」と回答した者が55.2％、「どちらかというとあてはまる」と回答した者が36.5％となります。留学生の方が授業内容を興味深いと感じていることが分かります[図表院留Ⅴ-4]。学部生に比べて「あてはまる」と回答した者が多いのは、問題関心がより広く、より積極的に授業に臨んでいるゆえであると考えられます。

図表Ⅴ-3 授業は興味がわくものが多い 大学院生全体

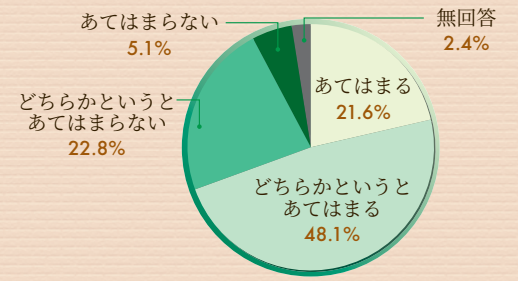


図表Ⅴ-4 授業は興味がわくものが多い 留学生のみ

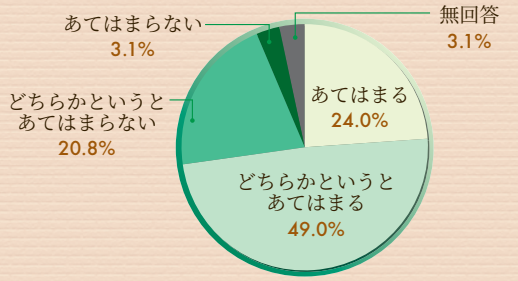


「授業内容が難しいと思うことがある」との問いに対し、「あてはまる」と回答した者が21.6％、「どちらかというとあてはまる」と回答した者が48.1％で、合計すると69.7％と学部生に比べて低い数字になりました[図表院全Ⅴ-5]。留学生に限るとその傾向は強まり、「あてはまる」と回答した者が24.0％、「どちらかというとあてはまる」と回答した者が49.0％となります[図表院留Ⅴ-6]。

図表Ⅴ-5 授業が難しいと思うことがある 大学院生全体

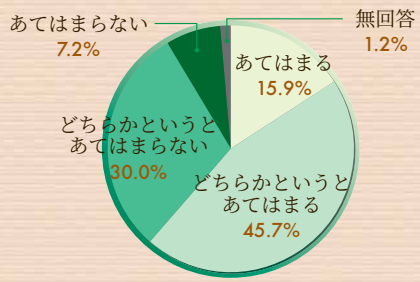


図表Ⅴ-6 授業が難しいと思うことがある 留学生のみ

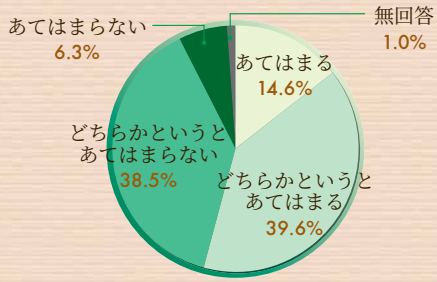


「専門科目の基礎的知識は足りている」という問いに対し、「あてはまる」と回答した者が15.9％、「どちらかというとあてはまる」と回答した者が45.7％で、合計すると61.6％と学部生に比べて明らかに高い数字になりました[図表Ⅴ-7]。留学生に限ると、「あてはまる」と回答した者が14.6％、「どちらかというとあてはまる」と回答した者が39.6％で、留学生の方が基礎知識の不足をより強く感じています[図表Ⅴ-8]。学部生に比べて「あてはまる」と回答した者が多いのは、より積極的に専門科目に取り組み、基礎的知識が定着しているからであると考えられます。

図表Ⅴ-7　専門科目の基礎知識は足りている　大学院生全体

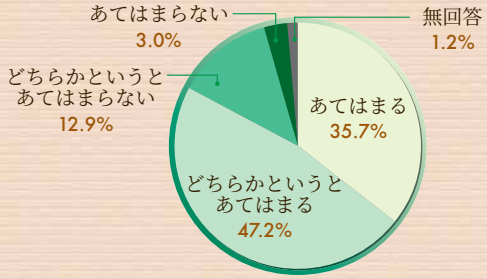


図表Ⅴ-8　専門科目の基礎知識は足りている　留学生のみ

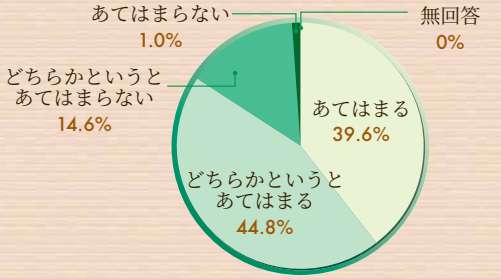


「授業のための予習・復習はしている」という問いに対し、「あてはまる」と回答した者が35.7％、「どちらかというとあてはまる」と回答した者が47.2％で、合計すると82.9％と学部生に比べて明らかに高い数字になりました[図表Ⅴ-9]。留学生に限るとその傾向は強まり、「あてはまる」と回答した者が39.6％、「どちらかというとあてはまる」と回答した者が44.8％となります[図表Ⅴ-10]。学部生と比べて「あてはまる」と回答した者が多いのは、より積極的、主体的に授業に取り組んでいるからであると考えられます。

図表Ⅴ-9　授業のための予習・復習はしている　大学院生全体

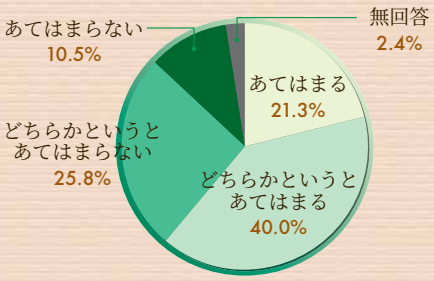


図表Ⅴ-10　授業のための予習・復習はしている　留学生のみ

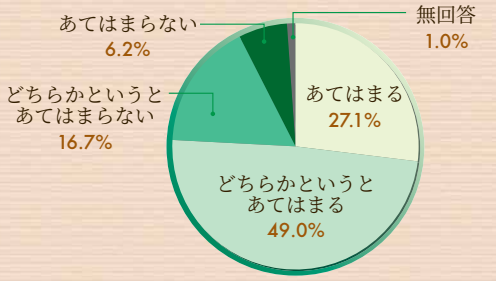


「語学能力が足りている」という問いに対し、「あてはまる」と回答した者が21.3％、「どちらかというとあてはまる」と回答した者が40.0％で、合計すると61.3％と学部生と比べて明らかに高い数字となりました[図表Ⅴ-11]。留学生に限ると、「あてはまる」と回答した者が27.1％、「どちらかというとあてはまる」と回答したものが49.0％で、留学生の方が語学能力に自信のある者が多いことが分かります[図表Ⅴ-12]。

図表Ⅴ-11　語学能力が足りている　大学院生全体

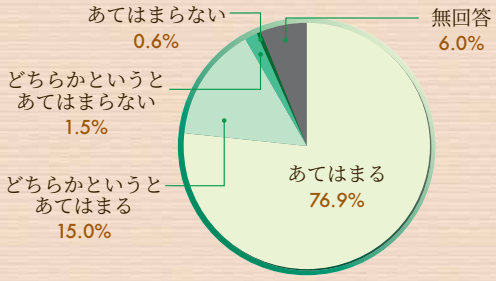


図表Ⅴ-12　語学能力が足りている　留学生のみ

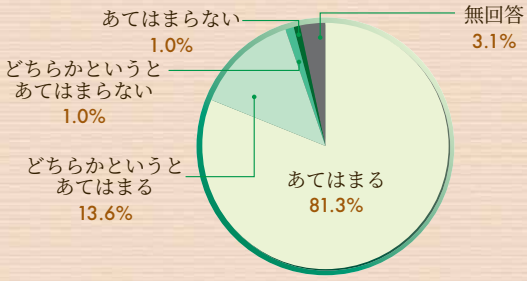


「ゼミは必ず出席している」との問いに対し、「あてはまる」と回答した者が76.9％、「どちらかというとあてはまる」と回答した者が15.0％で、合計すると91.9％になります。[図表Ⅴ-13]。留学生に限ると、「あてはまる」と回答した者が81.3％、「どちらかというとあてはまる」と回答した者が13.6％で、留学生の方がゼミの出席率が高いことが分かります[図表Ⅴ-14]。

図表Ⅴ-13　ゼミは必ず出席している　大学院生全体

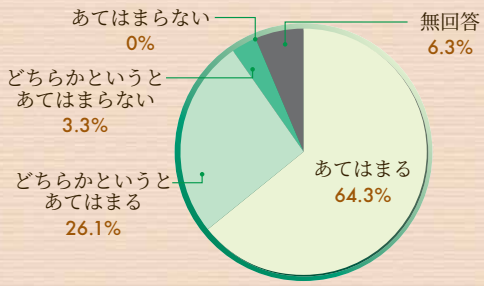


図表Ⅴ-14　ゼミは必ず出席している　留学生のみ

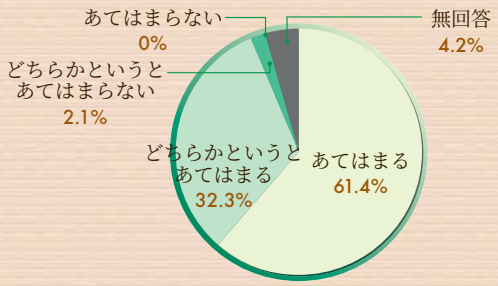


「ゼミの内容は興味深い」との問いに対し、「あてはまる」と回答した者が64.3％、「どちらかというとあてはまる」と回答した者が26.1％で、合計すると90.4％になります[図表Ⅴ-15]。この傾向は、留学生に限った場合も変わりません[図表Ⅴ-16]。

図表Ⅴ-15　ゼミの内容は興味深い　大学院生全体

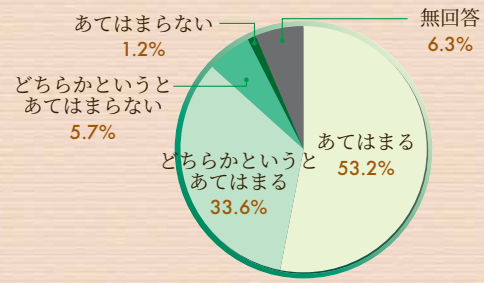


図表Ⅴ-16　ゼミの内容は興味深い　留学生のみ

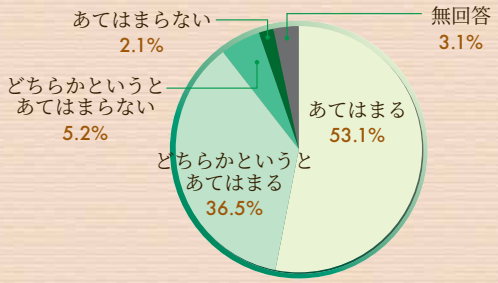


「ゼミでの発表の準備に十分時間を使っている」との問いに対し、「あてはまる」と回答した者が53.2％、「どちらかというとあてはまる」と回答した者が33.6％で、合計すると86.8％となりました[図表Ⅴ-17]。留学生に限ると、「あてはまる」と回答した者が53.1％、「どちらかというとあてはまる」と回答した者が36.5％で、合計では89.6％に達します[図表Ⅴ-18]。留学生の方が、日本語での発表のために必要となる時間が多いからだと考えられます。

図表Ⅴ-17　ゼミでの発表の準備に十分時間を使っている　大学院生全体

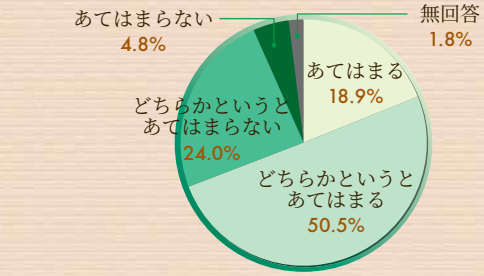


図表Ⅴ-18　ゼミでの発表の準備に十分時間を使っている　留学生のみ

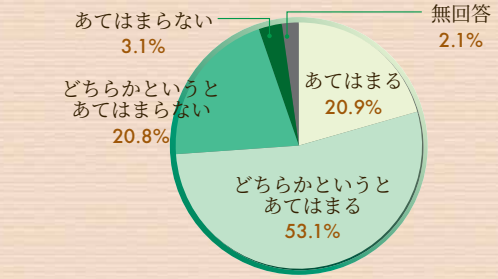


「研究の進め方がわかっている」との問いに対し、「あてはまる」と回答した者が18.9％、「どちらかというとあてはまる」と回答した者が50.5％で、合計すると69.4％になりました[図表Ⅴ-19]。留学生に限ると、「あてはまる」と回答した者が20.9％、「どちらかというとあてはまる」と回答した者が53.1％で、合計すると74.0％になります[図表Ⅴ-20]。日本人学生の方が研究の進め方に不安をもっている者が多いことが分かります。

図表Ⅴ-19　研究の進め方がわかっている　大学院生全体

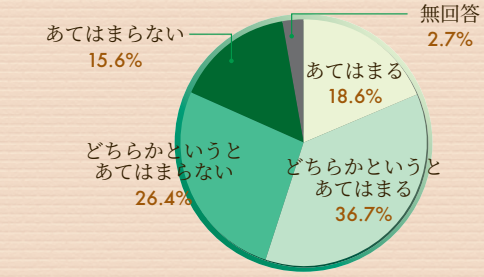


図表Ⅴ-20　研究の進め方がわかっている　留学生のみ

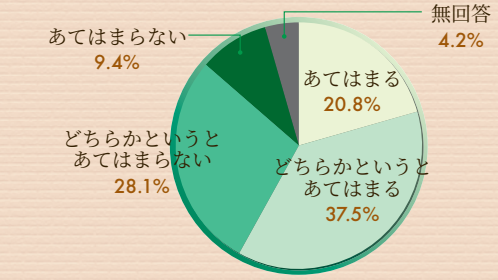


「研究テーマに迷いが生じている」との問いに対し、「あてはまる」と回答した者が18.6％、「どちらかといえばあてはまる」と回答した者が36.7％で、合計すると55.3％と半数以上の学生が研究テーマに迷いが生じていることが分かりました[図表Ⅴ-21]。この傾向は、留学生に限った場合も変わりません[図表Ⅴ-22]。研究テーマの設定について、より手厚い指導が望まれます。

図表Ⅴ-21　研究テーマに迷いが生じている　大学院生全体

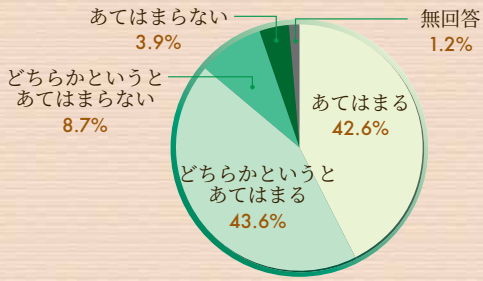


図表Ⅴ-22　研究テーマに迷いが生じている　留学生のみ

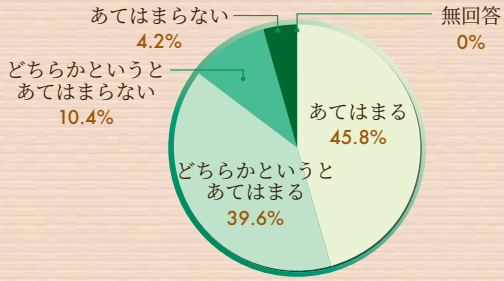


「授業やゼミでの人間関係になじめている」との問いに対し、「あてはまる」と回答した者が42.6％、「どちらかといえばあてはまる」と回答した者が43.6％で、合計すると86.2％となりました[図表Ⅴ-23]。なお、なじめていない学生の割合は、留学生に限定してもほぼ変わりません[図表Ⅴ-24]。

図表Ⅴ-23　授業やゼミでの人間関係になじめている　大学院生全体

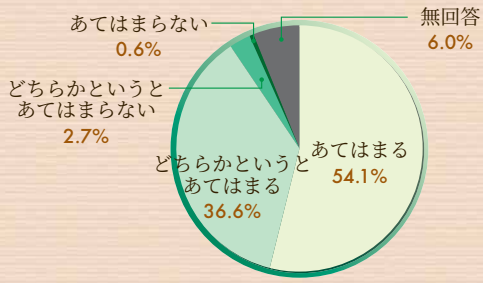


図表Ⅴ-24　授業やゼミでの人間関係になじめている　留学生のみ

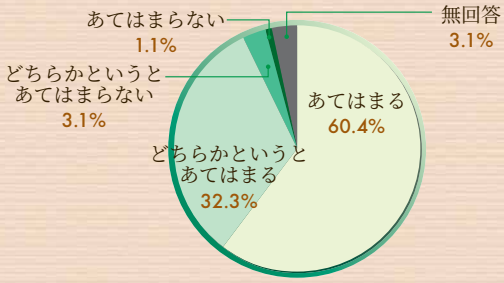


「指導教員との関係がうまくいっている」との問いに対し、「あてはまる」と回答した者が54.1％、「どちらかといえばあてはまる」と回答した者が36.6％で、合計すると90.7％となりました[図表Ⅴ-25]。留学生に限定すると、「あてはまる」と回答した者が60.4％、「どちらかといえばあてはまる」と回答した者が32.3％で、合計すると92.7％となります[図表Ⅴ-26]。

図表Ⅴ-25　指導教員との関係がうまくいっている　大学院生全体

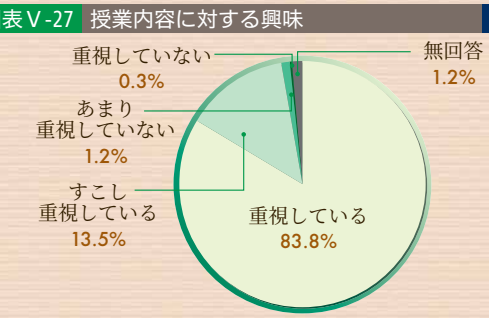


図表Ⅴ-26　指導教員との関係がうまくいっている　留学生のみ

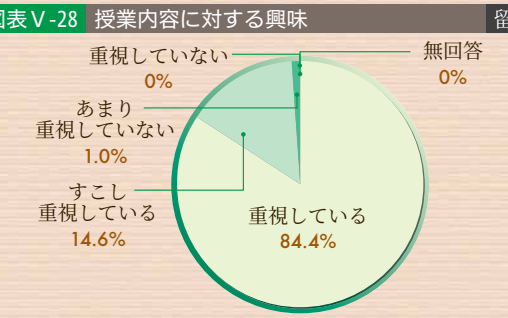


授業を履修・聴講する際に「授業内容に対する興味」を「重視している」と回答した者は83.8％、「すこし重視している」と回答した者は13.5％で、合計で97.3％となりました[図表Ⅴ-27]。留学生に限定した場合もこの傾向は変わりません[図表Ⅴ-28]。

図表Ⅴ-27　授業内容に対する興味　大学院生全体

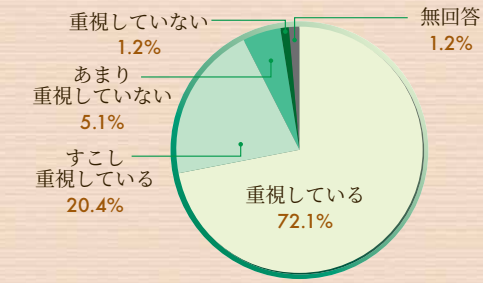


図表Ⅴ-28　授業内容に対する興味　留学生のみ

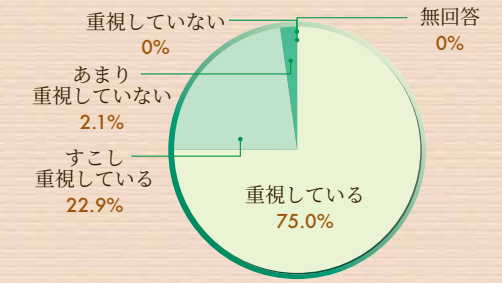


授業を履修・聴講する際に「自分の研究に役立てる」を「重視している」と回答した者は72.1％、「すこし重視している」と回答した者は20.4％で、合計で92.5％となりました[図表Ⅴ-29]。留学生に限定した場合、「重視している」と回答した者が75.0％、「すこし重視している」と回答した者が22.9％で、合計で97.9％となり、留学生の方が授業履修・聴講にあたって、自分の研究に役立てるということをより強く意識していることがうかがわれます[図表Ⅴ-30]。

図表Ⅴ-29　自分の研究に役立てる　大学院生全体

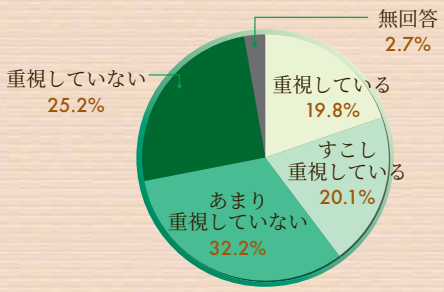


図表Ⅴ-30　自分の研究に役立てる　留学生のみ

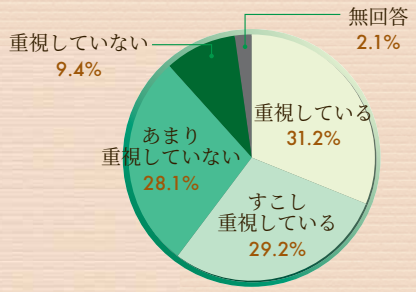


授業を履修・聴講する際に「就職に役立てる」を「重視している」と回答した者は19.8％、「すこし重視している」と回答した者は20.1％で、合計で39.9％となりました[図表Ⅴ-31]。留学生に限定すると、「重視している」と回答した者が31.2％、「すこし重視している」と回答した者が29.2％で、合計60.4％となりました[図表Ⅴ-32]。日本人学生よりも留学生の方が就職を意識して授業を履修・聴講していることが分かり、その数は6割強に達しています。

図表Ⅴ-31　就職に役立てる　大学院生全体

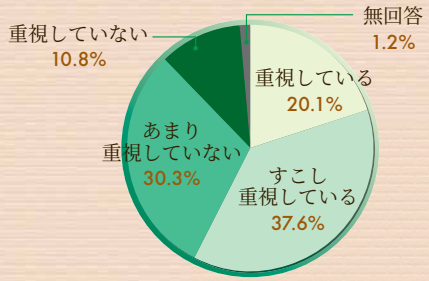


図表Ⅴ-32　就職に役立てる　留学生のみ

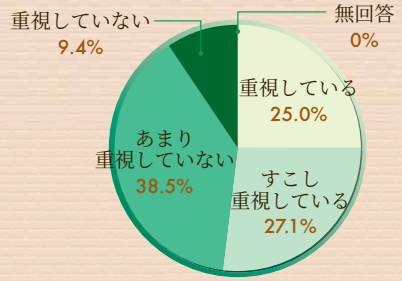


授業を履修・聴講する際に「指導教員以外の教員との関係づくり」を「重視している」と回答した者は20.1％、「すこし重視している」と回答した者は37.6％で、合計で57.7％となりました[図表Ⅴ-33]。留学生に限定すると、「重視している」と回答した者が25.0％、「すこし重視している」と回答した者が27.1％で、日本人学生の方が指導教員以外の教員との関係づくりを意識して授業を履修・聴講していることが分かります[図表Ⅴ-34]。

図表Ⅴ-33　指導教員以外の教員との関係づくり　大学院生全体

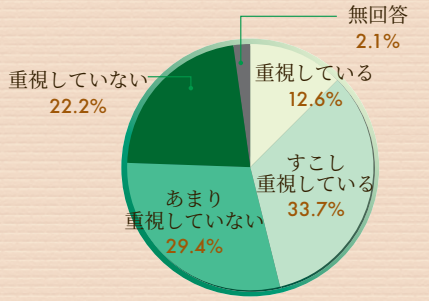


図表Ⅴ-34　指導教員以外の教員との関係づくり　留学生のみ

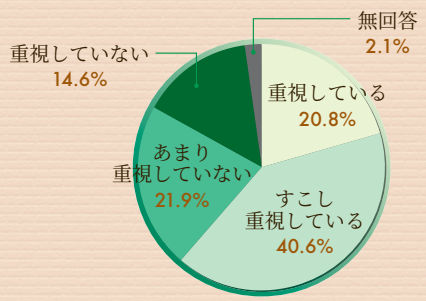


授業を履修・聴講する際に「単位の取りやすさ」を「重視している」と回答した者は12.6％、「すこし重視している」と回答した者は33.7％で、合計で46.3％と学部生より顕著に低い数字になりました[図表Ⅴ-35]。留学生に限定すると、「重視している」と回答した者は20.8％、「すこし重視している」と回答した者は40.6％で、合計で61.4％となりました[図表Ⅴ-36]。日本人学生に比べて留学生の方が単位の取りやすさを意識して授業を履修・聴講しているのは、日本語での学習や単位取得に不安を感じているためではないかと推測されます。学部学生と比較すると、大学院生の方が単位取得の容易さよりも授業の内容を重視していると考えられます。

図表Ⅴ-35　単位の取りやすさ　大学院生全体

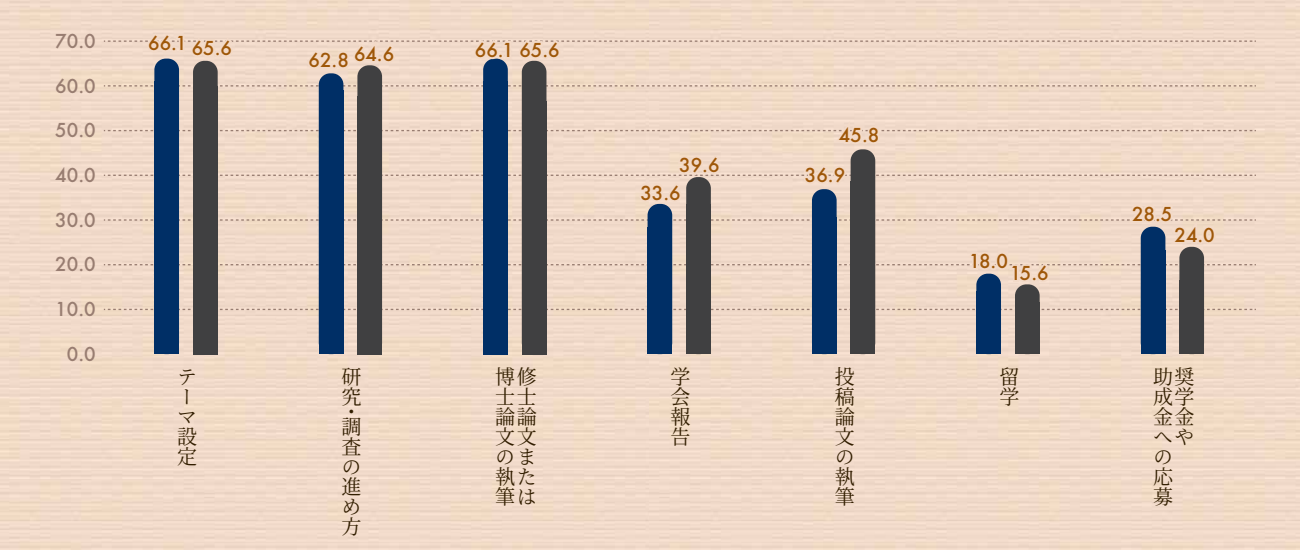


図表Ⅴ-36　単位の取りやすさ　留学生のみ



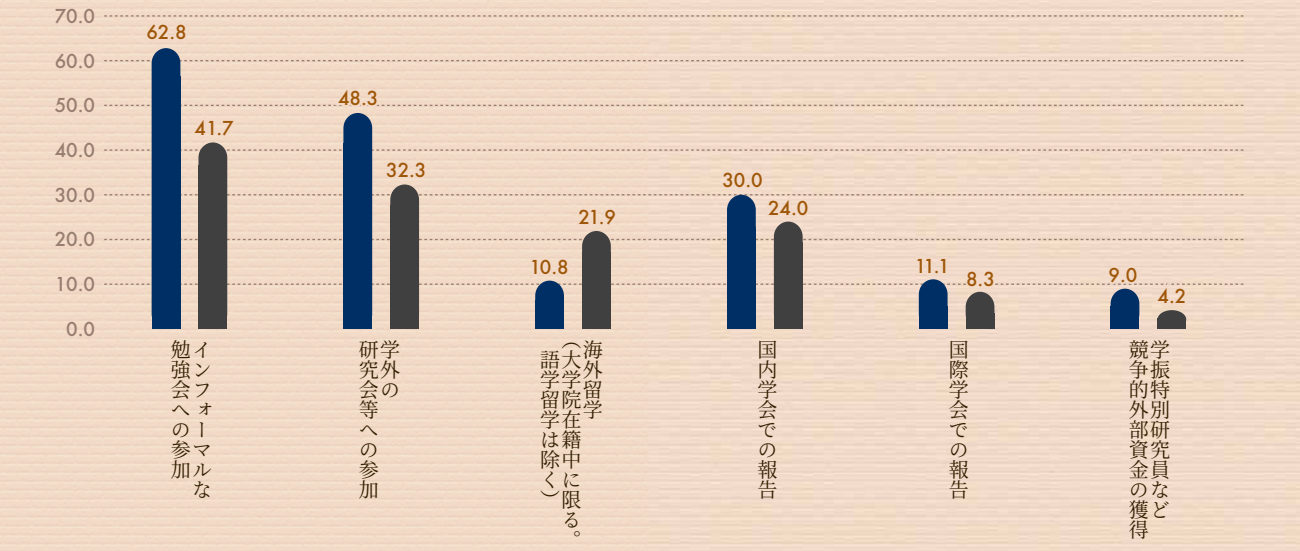
研究活動における「テーマ設定」、「研究・調査の進め方」、「修士論文または博士論文の執筆」、「学会報告」、「投稿論文の執筆」、「留学」、「奨学金や助成金への応募」という7つの項目について、「もっとも力になってくれた人はだれですか」と尋ねたところ、「だれにも相談したことがない」、「それら以外」、「無回答」を除けば、7つのいずれの項目についても「指導教員」がもっとも多く選択されました[図表V-37]。これは、留学生に限定した場合も変わりません[図表V-37]。指導教員に相談することが特に多い項目は、「テーマ設定」(66.1％)、「研究・調査の進め方」(62.8％)、「修士論文または博士論文の執筆」(66.1％)でした。

図表V-37　もっとも力になってくれた人(「指導教員」を選択した人の割合)　大学院生全体　留学生のみ



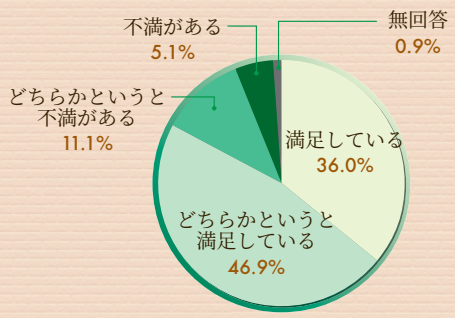
研究活動を進めていくにあたって、「インフォーマルな勉強会への参加」、「学外の研究会等への参加」、「海外留学(大学院在籍中に限る。語学留学は除く)」、「国内学会での報告」、「国際学会での報告」、「学振特別研究員など競争的外部資金の獲得」の6つの経験の有無を尋ねたところ、「インフォーマルな勉強会への参加」(62.8％)と「学外の研究会等への参加」(48.3％)については半数前後の学生が経験したことがあり、次いで多かったのが「国内学会での報告」(30.0％)でした[図表V-38]。留学生だけに限定すると、「インフォーマルな勉強会への参加」(41.7％)と「学外の研究会等への参加」(32.3％)、「国内学会での報告」(24.0％)となり、日本人学生と比べていずれの経験も少ないことが分かりました[図表V-38]。

図表V-38　経験の有無(参加「ある」と答えた人の割合)　大学院生全体　留学生のみ

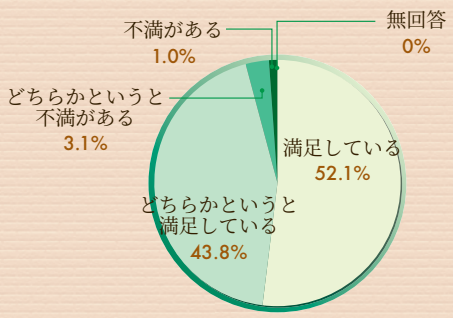


「一橋大学の教育システム（カリキュラムや各種制度）に満足していますか」との問いに対し、「満足している」と回答した者が36.0％、「どちらかというと満足している」と回答した者が46.9％で、合計すると82.9％となりました[図表Ⅴ-39]。留学生だけに限定すると、「満足している」と回答した者が52.1％、「どちらかというと満足している」と回答した者が43.8％で、合計すると95.9％となり、日本人学生以上に一橋大学の教育システムに対する満足度が高いことが明らかとなりました[図表Ⅴ-40]。

図表Ⅴ-39　満足度：一橋大学の教育システム　大学院生全体

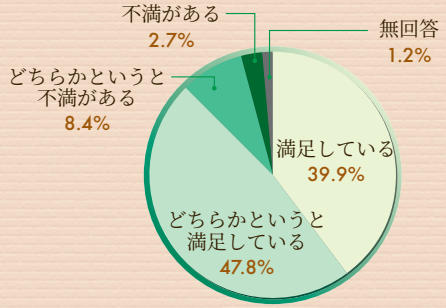


図表Ⅴ-40　満足度：一橋大学の教育システム　留学生のみ

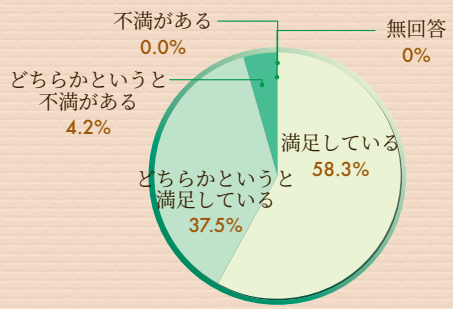


一橋大学の教育について、「一橋大学で受けている教育内容に満足していますか」との問いに対し、「満足している」と回答した者は39.9％、「どちらかというと満足している」と回答した者が47.8％で、合計すると87.7％となりました[図表Ⅴ-41]。留学生だけに限定すると、「満足している」と回答した者が58.3％、「どちらかというと満足している」と回答した者が37.5％で、合計すると95.8％となり、日本人学生以上に一橋大学で受けている教育内容に対する満足度が高いことが明らかとなりました[図表Ⅴ-42]。

図表Ⅴ-41　満足度：一橋大学で受けている教育内容　大学院生全体



図表Ⅴ-42　満足度：一橋大学で受けている教育内容　留学生のみ

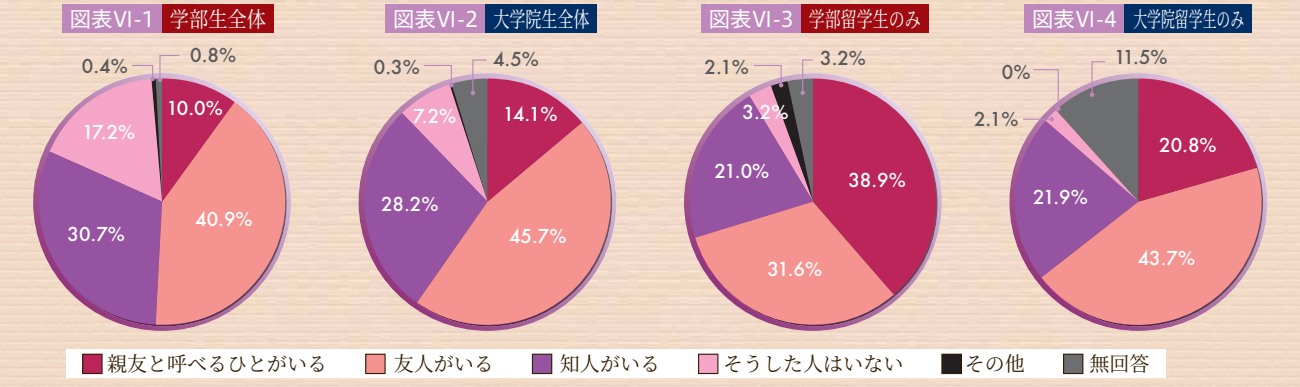


VI 学生生活について

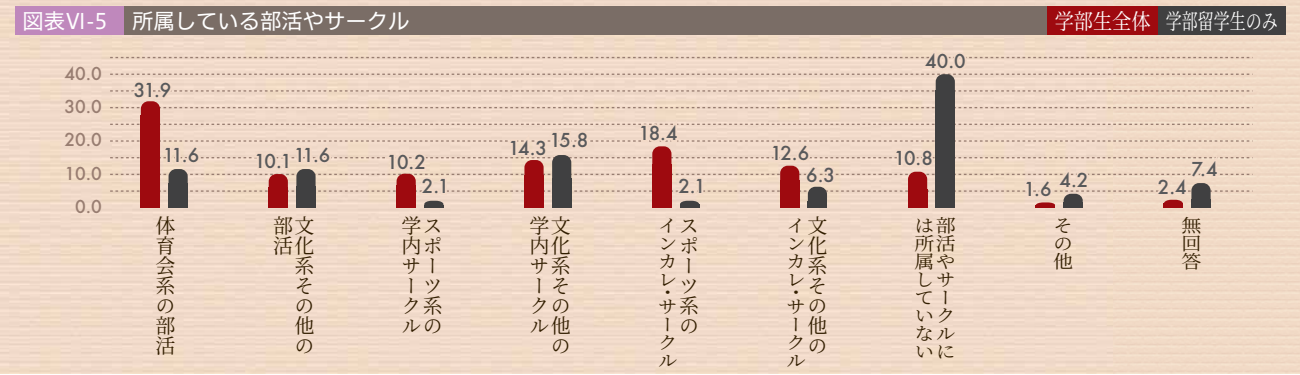
学部生
大学院生

大学内に自分と国籍もしくはエスニシティの異なる友人・知人がいない学部生は17.2％、院生は7.2％でした。[図表VI-1、図表VI-2]学部生の8割程度、大学院生の9割程度においては、国籍もしくはエスニシティを超えた交流の機会が学内にあることがうかがわれます。また、国籍もしくはエスニシティの異なる親友がいると答えた学生も1割程度いました。他方で留学生のみでみれば、友人・知人が全くいない学部留学生は3.2％、大学院留学生は2.1％であることから、大部分の留学生は、国籍もしくはエスニシティを超えた交流関係を学内に持っていますが、少数の留学生にとってはそうではない状況もうかがえます。[図表VI-3、図表VI-4]

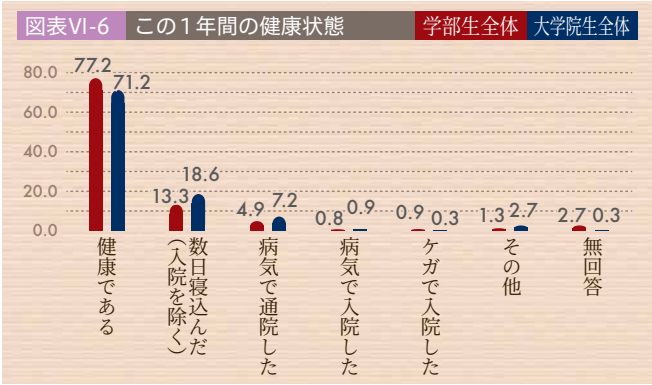
出身国が異なる友人・知人



学部生にとって部活・サークルの活動は学生生活のかなりの比重を占めています。部活やサークルに所属していない学部生は10.8％であり、大半が所属していることがわかります。所属先は体育会系の部活が31.9％と最も多く、3人に1人が体育会系に所属していることが分かります。他方で、留学生のみでみれば、部活やサークルに所属していない学部生が40.0％と最も多く、昨年度の23.1％から見ても大幅に高い割合で、日本人学生との違いがはっきりと見られます。[図表VI-5]

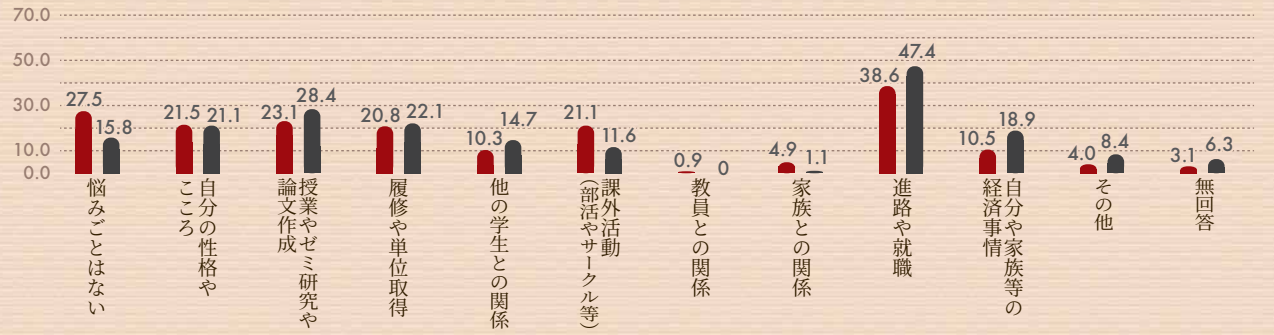


この一年間の健康状態については、「健康である」と答えた学部生は77.2％、院生は71.2％でした。院生については前回調査の58.2％よりもかなり上がっていました。風邪などで数日寝込んだ学生も健康な状態に含めれば、約9割の学部生、院生の健康状態は良好であったことがわかります。[図表VI-6]

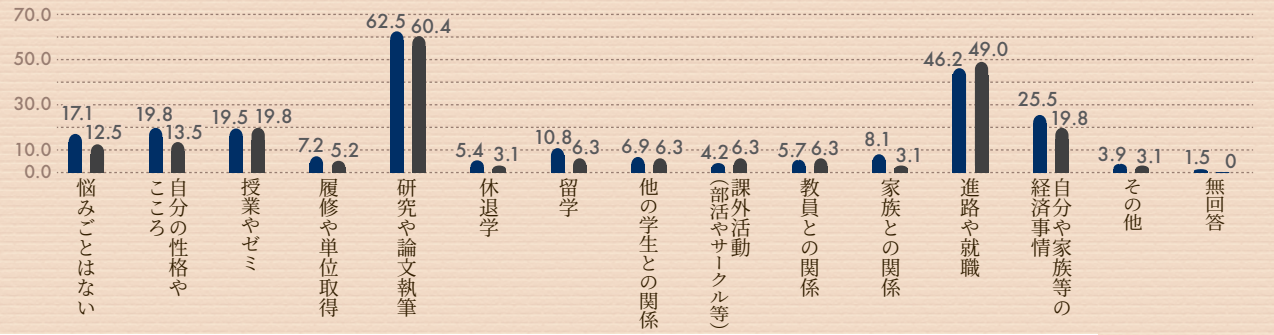


現在の悩みごとは学部生も院生も進路や就職についてが多く（学部生38.6％、院生46.2％）、将来への不安が高いことがわかります。また、同じく割合が高いのは学部生の授業やゼミ研究や論文作成の23.1％、院生の研究や論文執筆の62.5％という学業面でした。院生の第一位と第二位の悩みごとの順位は前回と逆転しており、院生の学業面についての悩みが増えていることがわかります。悩みごとが全くない学部生は27.5％、院生は17.1％であるため、7,8割の学生は悩みごとを抱えていることがわかります。他方で、留学生については学部生でも院生でも、授業や論文執筆についてと進路就職についての悩みが多く見られ、日本人同様の傾向がうかがえました。[図表Ⅵ-7、図表Ⅵ-8]

図表Ⅵ-7　現在の悩みごと　学部生全体　学部留学生のみ



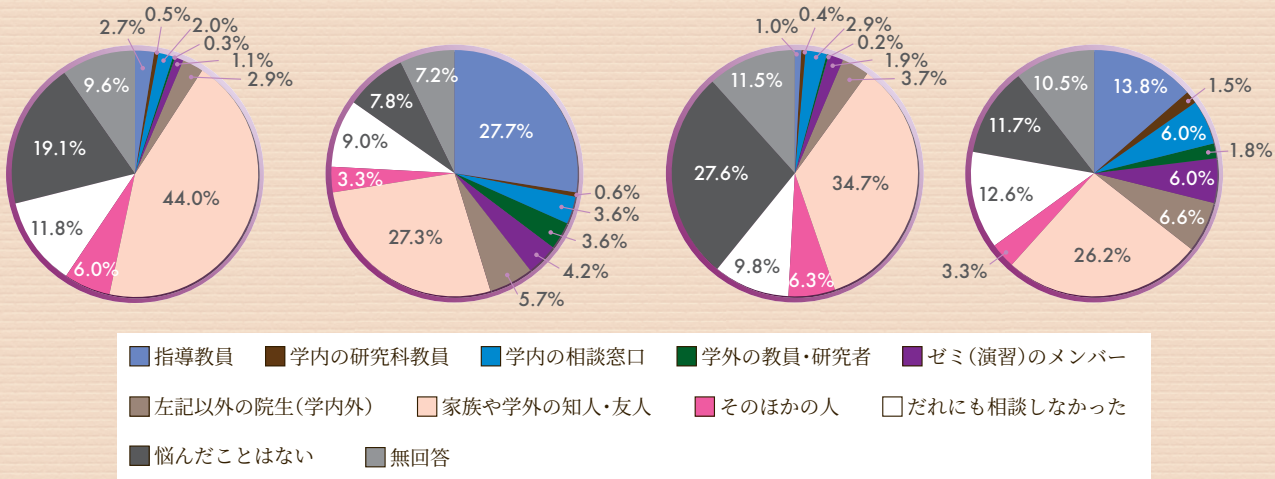
図表Ⅵ-8　現在の悩みごと　大学院生全体　大学院留学生のみ

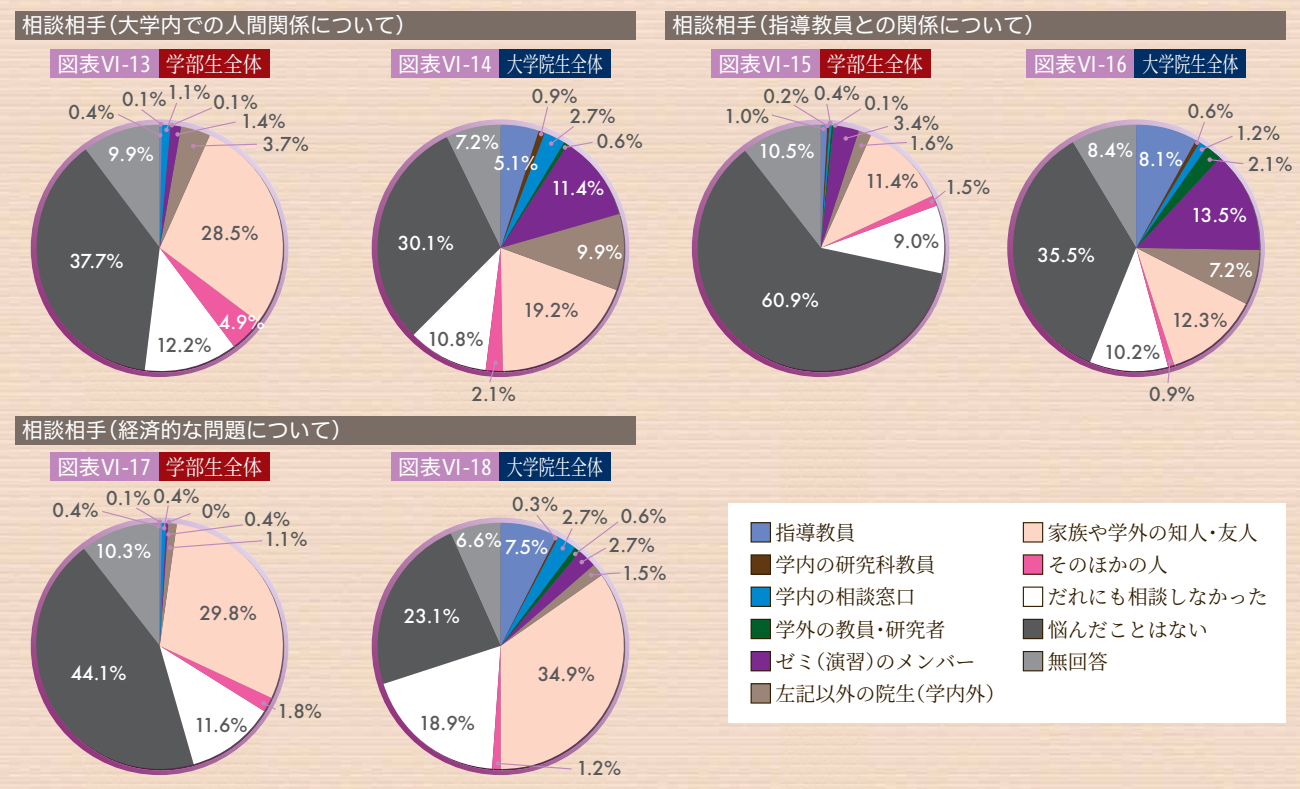


悩みの種類別に相談相手を尋ねたところ、進路選択の相談相手として指導教員を選んだのは、学部生では2.7％、院生では27.7％であり、学部生と院生では指導教員に相談する割合が大きく異なりました。就職活動や経済的な問題では家族や学外の知人・友人が学部生、院生ともに最も多くなっています。[図表Ⅵ-9、図表Ⅵ-10、図表Ⅵ-11、図表Ⅵ-12、図表Ⅵ-13、図表Ⅵ-14、図表Ⅵ-15、図表Ⅵ-16、図表Ⅵ-17、図表Ⅵ-18]

相談相手（進路選択について）　相談相手（就職活動について）

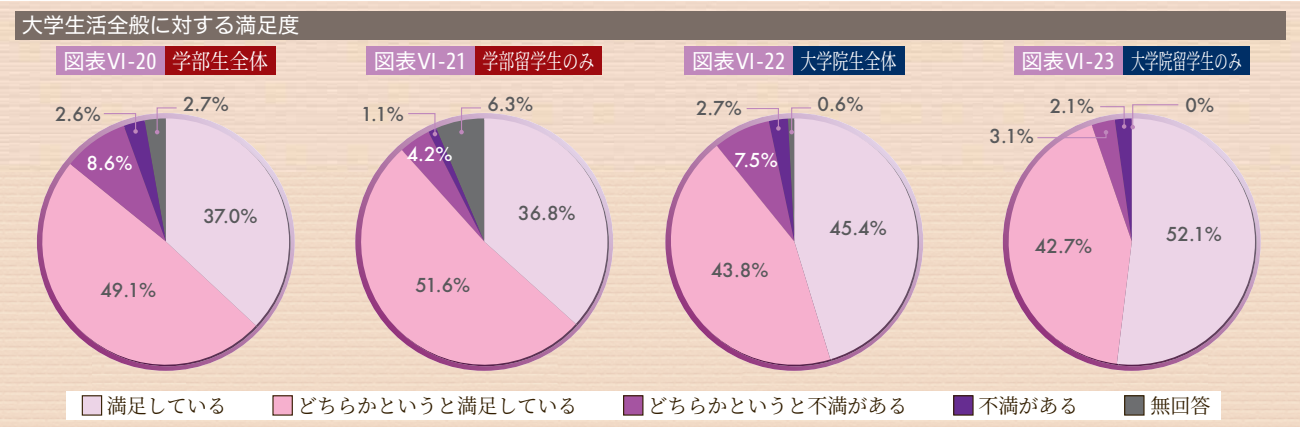
図表Ⅵ-9　学部生全体　図表Ⅵ-10　大学院生全体　図表Ⅵ-11　学部生全体　図表Ⅵ-12　大学院生全体





休学については約10％の院生はしたことがあり、留学生のみでみれば留学生の約2％が休学をしたことがありました。休学の理由としては、学費・生活費の捻出という経済的な理由が最も多くみられました。[図表VI-19]

大学生活全般についての満足度は、学部生の86.1％と大学院生の89.2％が「満足している」「どちらかというと満足している」と回答していました。また、留学生のみで見れば、それよりもさらに満足度が高い傾向が伺えました（学部留学生の88.4％、大学院留学生の94.8％）。全体として9割前後の学生が大学生活全般について満足していることがわかります。[図表VI-20、図表VI-21、図表VI-22、図表VI-23]



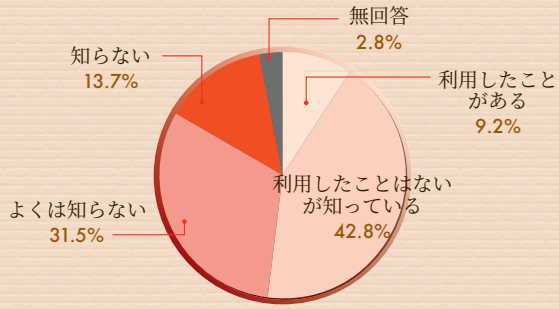
VII 大学が行なっている各種の支援について

学部生
大学院生

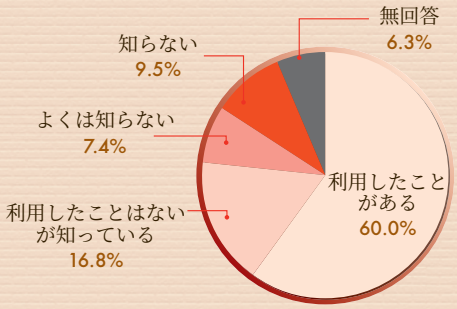
大学が行っている支援について、まず経済的な支援をみていきます。

授業料免除は9.2％の学部生が利用しており、前回調査（平成24年度調査、8.5％）より微増しました。特に学部の留学生のみでみれば、実に60.0％が利用しており前回（39.6％）から大幅に増加し、かなり定着してきたことがわかります。しかし、授業料免除について「知らない」と回答した学部生は13.7％おり、こちらも前回（11.2％）より微増しており、二極化傾向が見られます。[図表VII-1、図表VII-2]。

図表VII-1 認知度：授業料免除制度 学部生全体

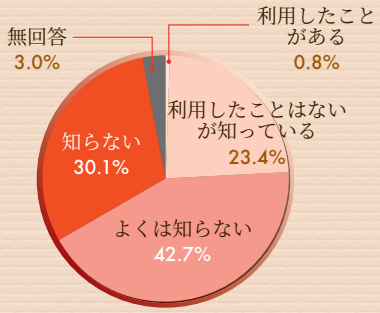


図表VII-2 認知度：授業料免除制度 学部留学生のみ

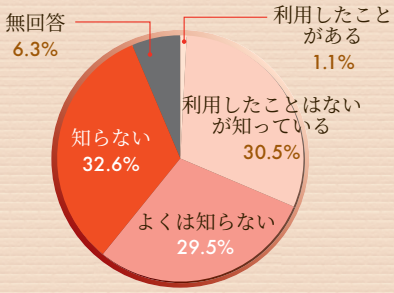


学生金庫による短期融資についての利用度は0.8％、いっぽう、この制度を「知らない」と答えた学部生は30.1％で、前回と同傾向でした。留学生についても同傾向で、前回（利用者が10.4％）から大幅に利用率が低下しました[図表VII-3、図表VII-4]。

図表VII-3 認知度：学生金庫による短期融資 学部生全体



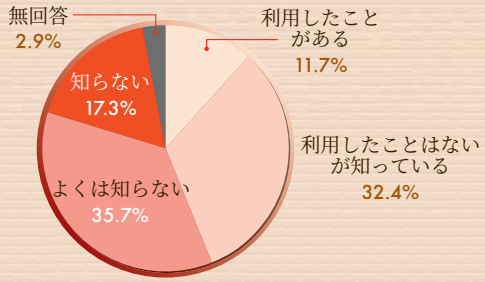
図表VII-4 認知度：学生金庫による短期融資 学部留学生のみ



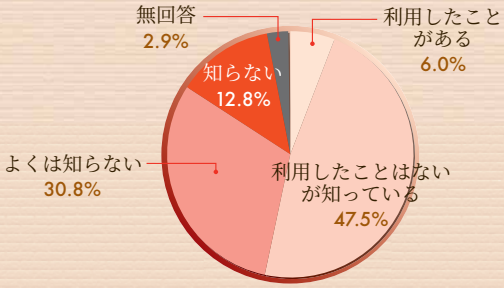
各種奨学金の斡旋については利用度は11.7％、「知らない」と答えた学生は17.3％で、前回と同傾向でした[図表VII-5]。

各種アルバイトの斡旋については、利用度は6.0％、「知らない」と回答した学生は12.8％でした[図表VII-6]。

図表VII-5 認知度：各種奨学金の斡旋 学部生全体



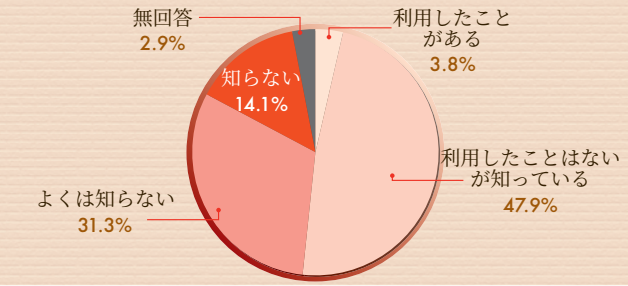
図表VII-6 認知度：各種アルバイトの斡旋 学部生全体



各種海外留学奨学金の斡旋については、利用度は3.8％、「知らない」と答えた学生は14.1％で、前回と同傾向でした[図表Ⅶ-7]。

学生支援課を中心として大学が行っている経済支援のそれぞれについて、一定程度の利用が確認されました。特に留学生にとってはよく定着しており、経済支援が有効に働いていると言えそうです。

図表Ⅶ-7　認知度：各種海外留学奨学金の斡旋　学部生全体

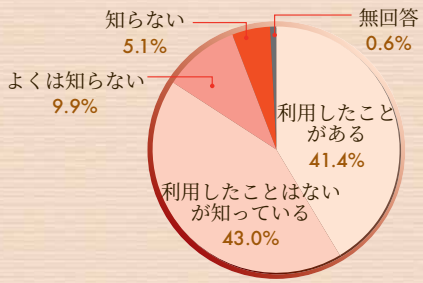


同様の支援について、大学院生の結果は次の通りです。

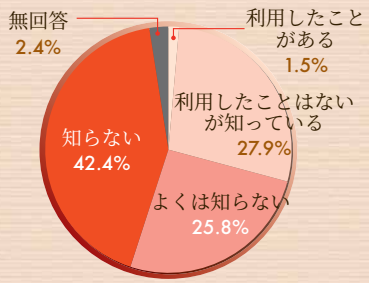
授業料免除については、「知らない」と回答した大学院生は5.1％（前回は10.7％）、この制度を利用したことがある大学院生は41.4％（前回は29.1％）に上り、学部生での認知・利用度を大きく上回っているだけではなく、前回よりもいっそう浸透しているようです[図表Ⅶ-8]。

しかし、学生金庫による短期融資については、制度の存在自体について「知らない」と答えた大学院生が42.4％（前回は45.7％）にのぼり、あまり浸透が進んでいないようです[図表Ⅶ-9]。

図表Ⅶ-8　認知度：授業料免除制度　大学院生全体



図表Ⅶ-9　認知度：学生金庫による短期融資　大学院生全体

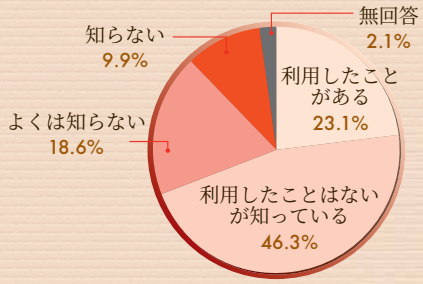


いっぽう奨学金斡旋については「利用したことがある」が23.1％、「知らない」が9.9％で、学部生よりも認知・利用度とも高く、浸透が進んでいるようです[図表Ⅶ-10]。

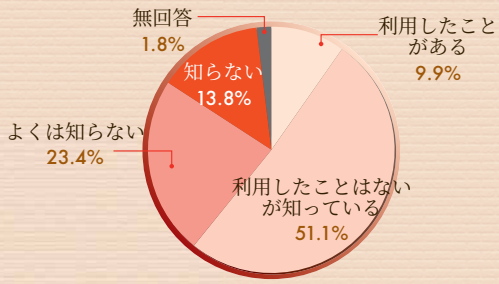
各種アルバイトの斡旋については利用度が9.9％、「知らない」と回答した学生は13.8％で、前回に見られた学部生との間の大きな差はなくなりました[図表Ⅶ-11]。

各種海外留学奨学金の斡旋については、利用度は4.8％、「知らない」と答えた学生は14.4％で、こちらも前回は見られた学部生との間の大きな差はなくなりました[図表Ⅶ-12]。

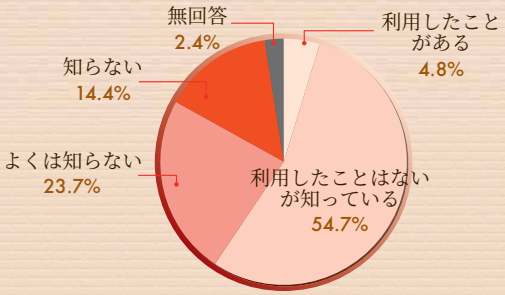
図表Ⅶ-10　認知度：各種奨学金の斡旋　大学院生全体



図表Ⅶ-11　認知度：各種アルバイトの斡旋　大学院生全体



図表Ⅶ-12　認知度：各種海外留学奨学金の斡旋　大学院生全体



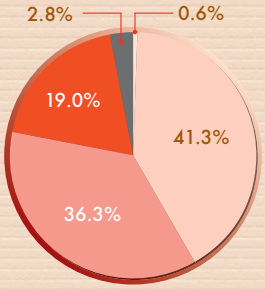
次に学生支援のための相談機関・相談ツールの利用度とその制度について「知らない」と答えた学生の比率を、まずは学部生に関して見ていきます。それぞれの利用度と「知らない」と答えた学生の比率は、以下に示す通りです[図表Ⅶ-13、図表Ⅶ-14、図表Ⅶ-15、図表Ⅶ-16、図表Ⅶ-17、図表Ⅶ-18、図表Ⅶ-19、図表Ⅶ-20]。

・ハラスメントの相談は0.6％、19.0％（前者が利用度、後者が「知らない」と答えた学生の比率：以下同様）。
・APLACでの相談は3.4％、28.7％。
・APLACで行っている学修支援は3.2％、30.0％。
・学生相談室の相談について4.6％、20.8％。
・保健センターでの相談については9.6％、19.0％。
・キャリア支援室での相談は11.0％、17.5％。
・障害学生支援室での相談は0.5％、33.9％。
・学生意見箱や学長メールについては0.5％、38.2％。

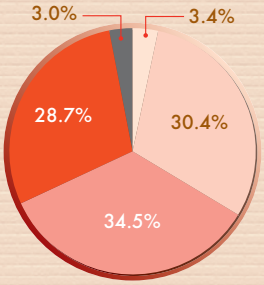
以上の様々な相談機関・相談ツールの利用度と認知度はそれほど高くはなく、また全体に前回調査より「知らない」とする回答が微増しています。問題が少なければこれらの数字も小さくなる傾向があると思われますので、利用度・認知度がそれほど高くないことがよくないことだとも言えません。

学部生全体

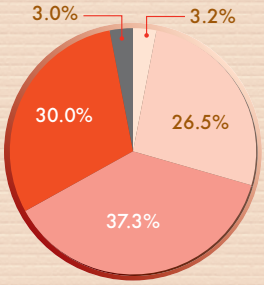
図表Ⅶ-13
認知度：ハラスメントの相談



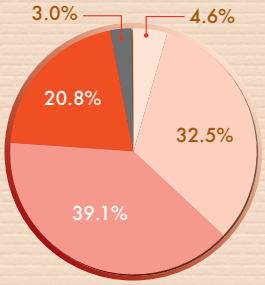
図表Ⅶ-14
認知度：APLACでの相談



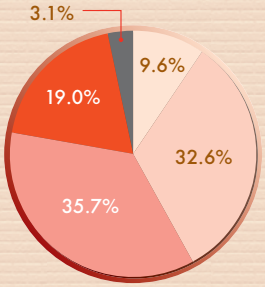
図表Ⅶ-15
認知度：APLACが行っている学修支援



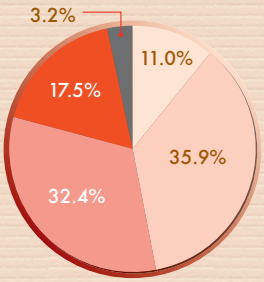
図表Ⅶ-16
認知度：学生相談室での各種相談



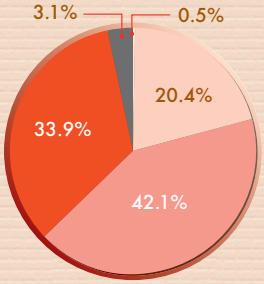
図表Ⅶ-17
認知度：保健センターでの各種相談



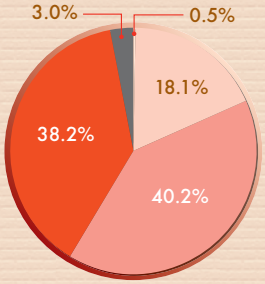
図表Ⅶ-18
認知度：キャリア支援室での各種相談



図表Ⅶ-19
認知度：障害学生支援室での相談



図表Ⅶ-20
認知度：学生意見箱や学長メール



□利用したことがある　□利用したことはないが知っている　□よくは知らない　■知らない　■無回答

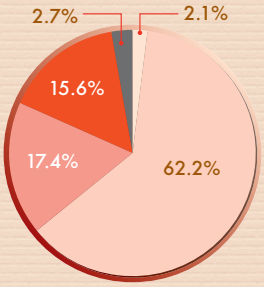
続いて、大学院生の状況を示します[図表Ⅶ-21、図表Ⅶ-22、図表Ⅶ-23、図表Ⅶ-24、図表Ⅶ-25、図表Ⅶ-26]。

・ハラスメントの相談は2.1％、15.6％。
・学生相談室の相談について13.8％、7.8％。
・保健センターでの相談については16.5％、9.3％。
・キャリア支援室での相談は17.7％、4.8％。
・障害学生支援室での相談は1.5％、25.2％。
・学生意見箱や学長メールについては1.5％、32.7％。

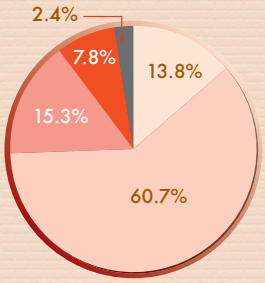
全体に前回調査よりも利用度・認知度とも微増しており、各種制度の浸透が進んでいるといえます。また学部生よりも認知度・利用度が高めになっており、ある意味では学生生活の中で様々な問題を抱えている大学院生は、学部生よりも多めであると言えそうです。今後、大学院生向けの各種制度の重要性は高まっていく可能性がありそうです。

大学院生全体

図表Ⅶ-21
認知度：ハラスメントの相談



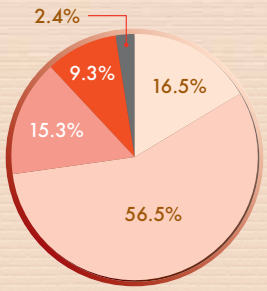
図表Ⅶ-22
認知度：学生相談室での各種相談



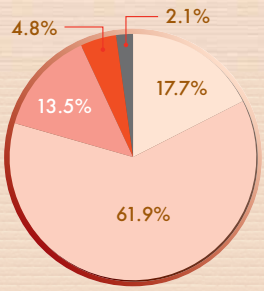
□利用したことがある　□利用したことはないが知っている
□よくは知らない　■知らない　■無回答

大学院生全体

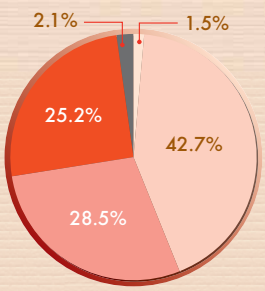
図表Ⅶ-23 認知度：保健センターでの各種相談



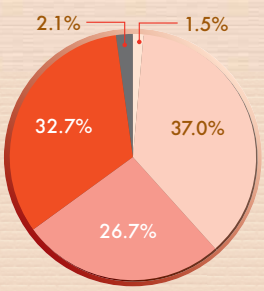
図表Ⅶ-24 認知度：キャリア支援室での各種相談



図表Ⅶ-25 認知度：障害学生支援室での相談



図表Ⅶ-26 認知度：学生意見箱や学長メール



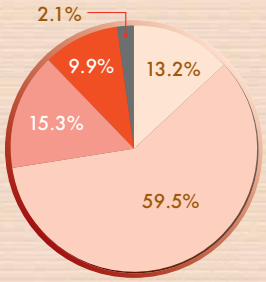
□利用したことがある　□利用したことはないが知っている　□よくは知らない　■知らない　■無回答

最後に大学院生向けだけに実施されている各種のキャリア支援策についても利用度と「知らない」とする率を見てみましょう。[図表Ⅶ-27、図表Ⅶ-28、図表Ⅶ-29、図表Ⅶ-30、図表Ⅶ-31]。

・個別相談（アカデミック・キャリア支援）については13.2％、9.9％。
・個別相談（プロフェッショナル・キャリア支援）については8.7％、12.9％。
・アカデミックキャリア講習会については17.1％、12.6％。
・各種セミナー（ノンアカデミック・キャリア支援）については16.2％、15.0％。
・自主ゼミ（ノンアカデミック・キャリア支援）については4.5％、24.0％。

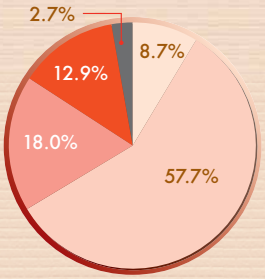
大学院生全体

図表Ⅶ-27 認知度：個別相談（ｱｶﾃﾞﾐｯｸ・ｷｬﾘｱ支援）

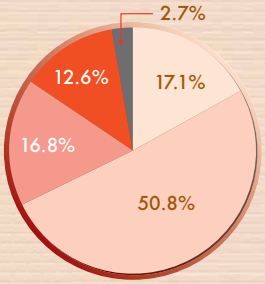


大学院生全体

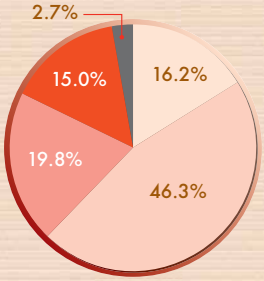
図表Ⅶ-28 認知度：個別相談（ﾌﾟﾛﾌｪｯｼｮﾅﾙ・ｷｬﾘｱ支援）



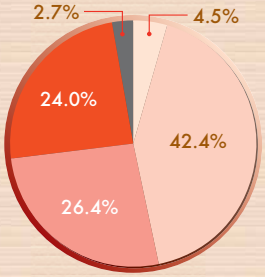
図表Ⅶ-29 認知度：アカデミック・キャリア講習会



図表Ⅶ-30 認知度：各種セミナー（ﾉﾝ・ｱｶﾃﾞﾐｯｸ・ｷｬﾘｱ支援）



図表Ⅶ-31 認知度：自主ゼミ（ﾉﾝ・ｱｶﾃﾞﾐｯｸ・ｷｬﾘｱ支援）



□利用したことがある　□利用したことはないが知っている　□よくは知らない　■知らない　■無回答

これら大学院生向けだけに実施されているキャリア支援策は全体に利用度・認知度とも高めで、大学院生の将来設計に対する不安の高さを浮き彫りにしていると言えます。なお、これら大学院生向けだけの支援策を利用したことがない大学院生がなぜ利用していないかの理由を調べてみた結果が[図表Ⅶ-32]です。もっとも多く挙がった理由は「周囲への相談や自力で解決できる」（27.4％）でしたが、二番目・三番目の理由として「自分に役立つのかがわからない」（24.5％）、「利用方法がわかりにくい」（14.8％）となり、支援策の浸透がまだ不十分であることが推察されます。今後一層の浸透を図ることが重要でしょう。

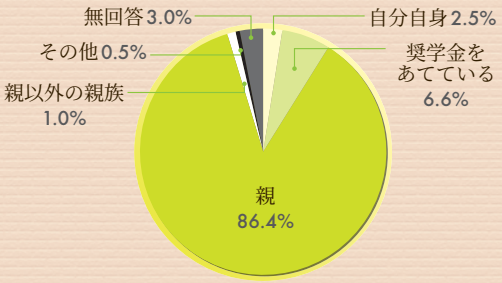
図表Ⅶ-32 キャリア支援室大学院部門を活用したことのない理由　大学院生全体

Ⅷ 経済的な状況について

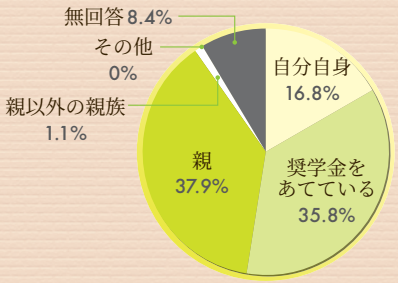
学部生
大学院生

本学では、9割近い学部生が、授業料や勉学費を主に親が支えています[図表Ⅷ-1]。ただし、外国人留学生に関しては、親が学費を主に支えていると回答した人は全体の4割に満たず、これとほぼ同じ割合の留学生が奨学金を学費にあてているとしており、日本人学生と大きな違いが見られます。さらには、アルバイト等の収入から自分自身で学費を負担している学生が多いのも、外国人留学生の特徴と言えるでしょう[図表Ⅷ-2]。

図表Ⅷ-1 学費(授業料や勉学費)を主に支えている人 学部生全体

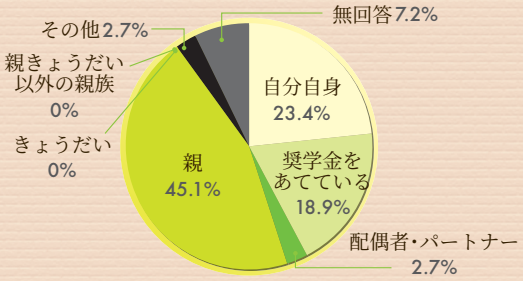


図表Ⅷ-2 学費(授業料や勉学費)を主に支えている人 学部留学生のみ

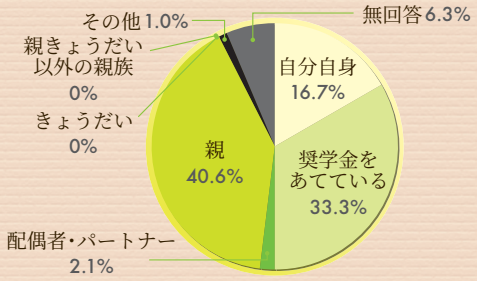


大学院生が親に授業料や研究活動費を提供してもらっている割合は、全体の半分以下です[図表Ⅷ-3]。学部生と比較すると、学費を奨学金や自己収入から拠出する院生が多いことが分かります(学部生9.1%、大学院生42.3%)。また、学部生と同様に、大学院に在籍している留学生が親に学費を依存できる度合いは、日本人大学院生に比べて低く、奨学金を支えにしている割合が高い傾向があります[図表Ⅷ-4]。

図表Ⅷ-3 学費(授業料や勉学費)を主に支えている人 大学院生全体



図表Ⅷ-4 学費(授業料や勉学費)を主に支えている人 大学院留学生のみ

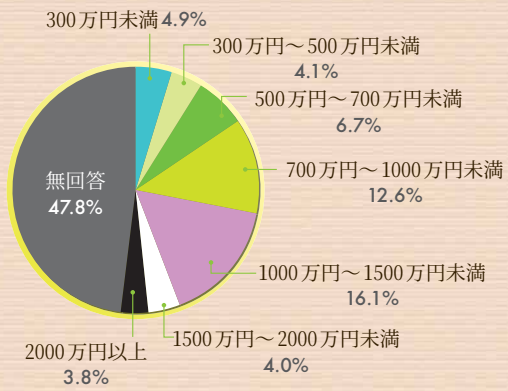


今回の調査では、経済的な状況をより具体的に捉えるために、学費を主に支えている人の年収(複数いる場合はその合計)を尋ねています。

学部生全体の内訳をみると、無回答者が半数近くもいるため、回答の結果を解釈する際には注意が必要です[図表Ⅷ-5]。

無回答者(47.8%)以外では学費支持者の年収が「1000万円～1500万円未満」の回答者が占める割合が最も高く(16.1%)、「700万円～1000万円未満」がそれに続きます(12.6%)。ちなみに、厚生労働省『国民生活基礎調査』によりますと、平成24年の「児童のいる世帯」の年間所得は673万円です。

図表Ⅷ-5 学費を主に支えている人の年収 学部生全体

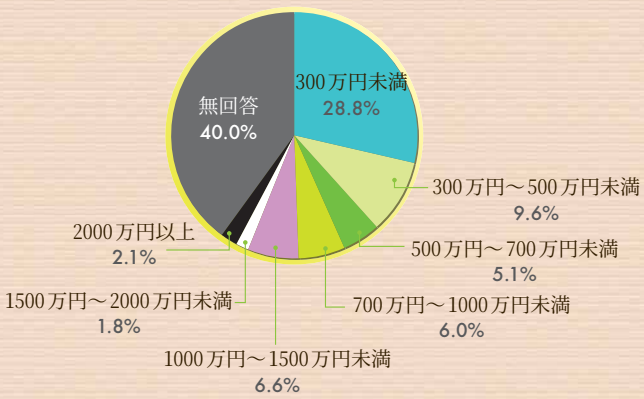


先にみたように、学費を奨学金や自己収入で賄う回答者の割合が学部生よりも高いため、大学院の学費支持者の年収は学部生のそれとは大きく異なります[図表Ⅷ-6]。大学院生の無回答率も４割と高く、結果の解釈には注意が必要です。

無回答者（40.0％）以外では年収が「300万円未満」と回答した者の割合が最も高く（28.8％）、「300万円～500万円未満」が9.6％とそれに続きます。学部学生よりも年収の分布が低いほうに偏っている理由としては、学部学生と比較すると学費を自弁する・奨学金で支払う者が多いためでしょう（また、調査では尋ねていませんが、大学院生のほうが親の年齢が高い傾向があることも背景にあるでしょう）。なお、図表は省略しますが、留学生は学部・大学院のそれぞれで、日本人よりも無回答率が高く、年収が低めに分布する傾向が見られました。これは冒頭で確認したように、留学生のほうが親に学費を依存できる度合いが低いことに起因しているものだと思われます。

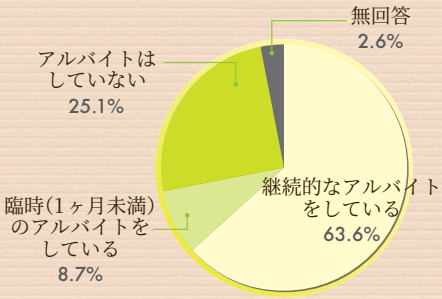
今回の調査では無回答率が非常に高く、過去と比較すると約２倍になっています。項目選択方式ではなく、回答者自身が収入を記入する形式にしたこと、個人情報に関する意識の変化が影響していると思われます。今後は無回答率を低くする工夫が必要でしょう。

図表Ⅷ-6　学費を主に支えている人の年収　大学院生全体

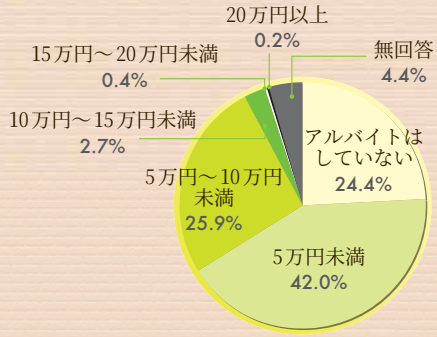


現在アルバイトをしている学部生の割合は全体の72.3％です[図表Ⅷ-7]。学部生の67.9％は月額収入が10万円未満のアルバイトに従事しています[図表Ⅷ-8]。アルバイト代の多くは娯楽費、生活費、貯金などに充てられており、家族からの支えを補完する収入源であることがうかがえます[図表Ⅷ-9]。

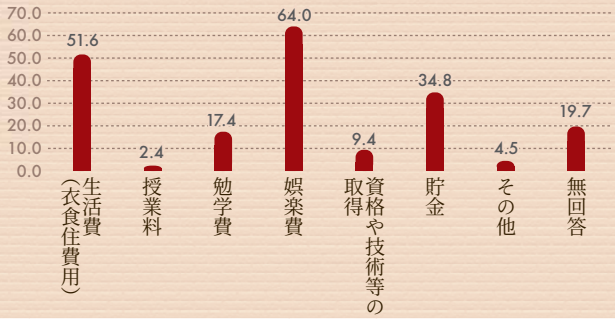
図表Ⅷ-7　現在アルバイトをしているか　学部生全体



図表Ⅷ-8　最近１ヵ月のアルバイトによる収入　学部生全体

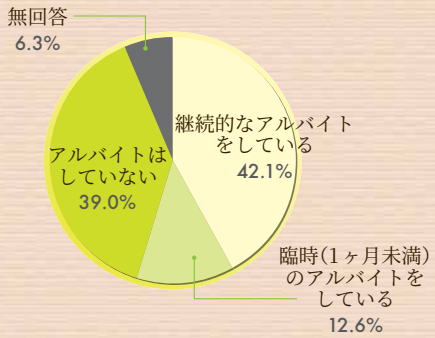


図表Ⅷ-9　アルバイトによる収入の使い道　学部生全体

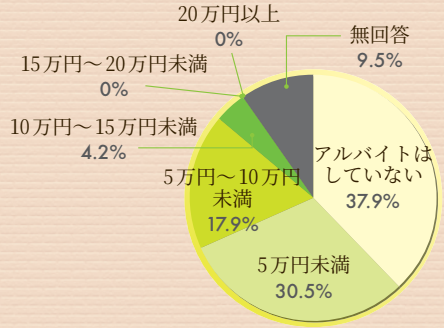


外国人留学生に関しては、アルバイトをしている学部生の割合が全体の54.7％と日本人学生よりも低くなっています[図表Ⅷ-10]。これは奨学金を学費に充てている割合が高いことによるものでしょう。留学生の48.4％が10万円未満のアルバイトに従事しています[図表Ⅷ-11]。アルバイト代の使い道については生活費を選ぶ回答者が最も多く、娯楽費、勉学費と続きます。娯楽費の割合も高いので、補助的な収入源であることは日本人学部生と共通しますが、留学生にとってアルバイトの収入は生活費や勉学を支える重要なものと捉えられているようです[図表Ⅷ-12]。

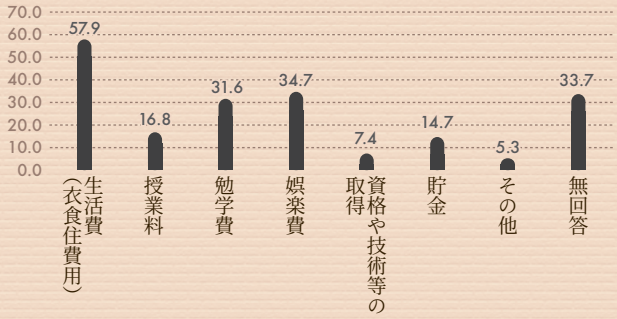
図表Ⅷ-10　現在アルバイトをしているか　学部留学生のみ



図表Ⅷ-11　最近１ヵ月のアルバイトによる収入　学部留学生のみ

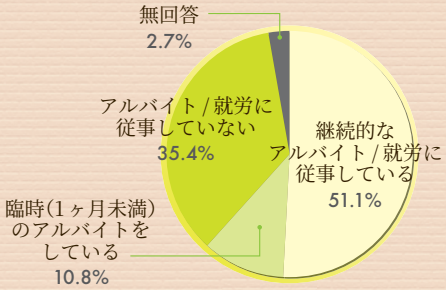


図表Ⅷ-12　アルバイトによる収入の使い道　学部留学生のみ

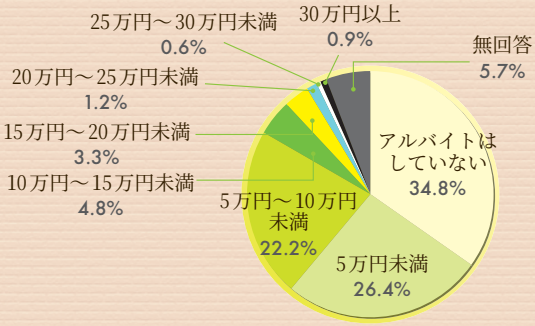


次に、大学院生の結果を見てみましょう。学部生と大学院生を比較して異なるのは、アルバイト（大学院生はアルバイト／就労）に従事していない者の割合が、大学院生では35.4%となっており、学部生（25.1%）より約10%ポイント多い点です［図表Ⅷ-13、図表Ⅷ-14］。学部生と比べると、大学院生は授業や研究活動により多くの時間をあてることを選択しているのかもしれません。収入の使い道も大学院生のほうが学部生よりも生活費、研究活動費中心になっています［図表Ⅷ-15］。

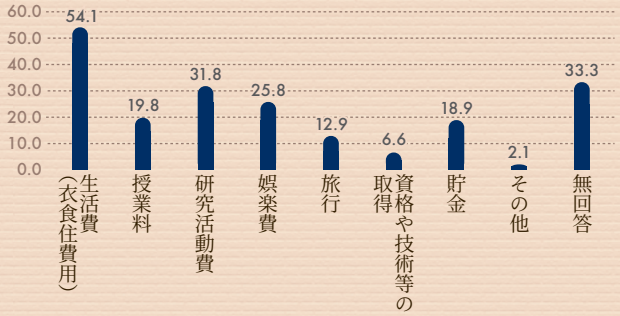
図表Ⅷ-13　現在アルバイトをしているか　大学院生全体



図表Ⅷ-14　最近１ヵ月のアルバイトによる収入　大学院生全体



図表Ⅷ-15　アルバイトによる収入の使い道　大学院生全体

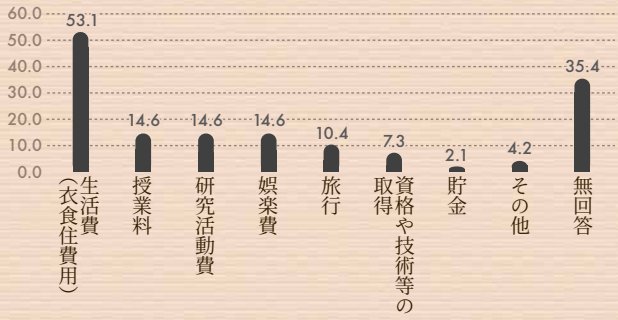


とはいえ、前回調査（平成24年度調査）と比べるとアルバイト／就労に従事する大学院生の割合は大幅に増加しており（47.6%→72.3%に増加）、収入を得る必要性が以前よりも高まっている状況がうかがえます。

大学院留学生は、臨時の就労／アルバイトに従事する割合がやや高く（14.6%）、そのために５万円未満の月収の者が多い（34.4%）結果になりましたが、日本人大学院生と大学院留学生の間に大きな差異は見られませんでした（図表は省略）。

ただし、収入の使い道については、生活費が最も多い点は共通するものの、大学院留学生は研究活動費と娯楽費に使う割合が少ない傾向に違いがみとめられました。アルバイトに従事する大学院留学生にとって、その収入は生活費を支える基盤になっているようです［図表Ⅷ-16］。

図表Ⅷ-16　アルバイトによる収入の使い道　大学院留学生のみ



IX 進路計画について

学部生

学部生対象調査では、進路計画について、「卒業後の進路希望」、「どのような職業につきたいか」、「職業をえらぶ時に大切にする(した)こと」の3つを尋ねています。

学部生全体に尋ねた「卒業後の進路希望」は、「就職する」が78.7％ともっとも多く、約8割を占めています。次いで「わからない」(7.9％)、「一橋大学の大学院に進学する」(6.8％)の順に多く、これら以外の回答は少数です[図表IX-1]。

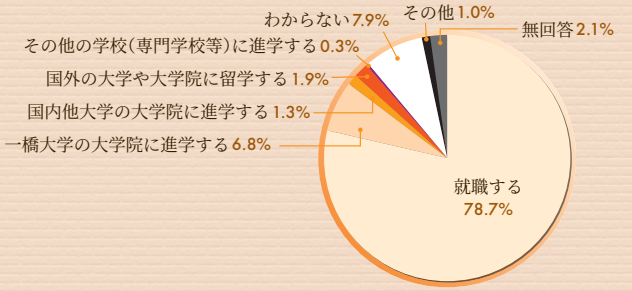
「どのような職業につきたいか」は該当するものを3つ選んでもらいました。なお、卒業後の職業が決まっている人にはその職業を1つ選んでもらいました[図表IX-2]。上位5番目までは、「営業職」(44.8％)、「事務職」(33.7％)、「行政職(公務員)」(25.9％)、「専門職(弁護士、公認会計士等)」(17.5％)、「マスコミ(記者、アナウンサー、プロデューサー等)」(16.2％)、の順でした。「大学や公的機関の教育研究職」(7.4％)と「企業等の研究職」(11.5％)を合計すると18.9％で、このように教育研究職を広く捉えると、「専門職」を若干上回っています。なお、この設問は3つまでの複数回答ができることに留意する必要があります。

「職業をえらぶ時に大切にする(した)こと」の設問も先の設問と同様に該当するものを3つ選んでもらいました。比率の高い順にみると、第1位「やりがいがある」(62.8％)が群を抜いて多く、次いで、第2位「高収入が期待できる」(48.0％)、第3位「人や社会の役に立つことができる」(46.1％)、第4位「安定した生活が保証されている」(45.7％)の3項目がほぼ並び、これらからかなり離れて「組織にしばられずに自由な行動ができる」(19.6％)が第5位に位置しています[図表IX-3]。

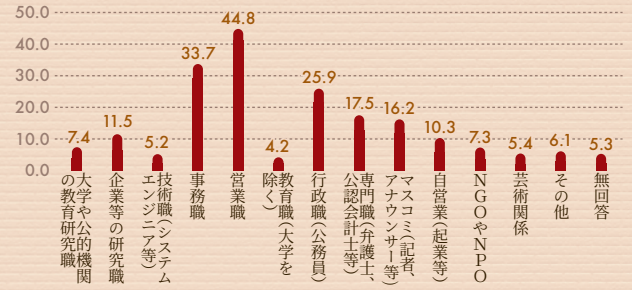
学部生のうち、留学生についての集計結果をみると[図表IX-4]、「卒業後の進路希望」に関して最も多い回答は学部生全体と同じく「就職する」(51.6％)ですが、その比率は約5割に留まり、回答の分散傾向がみられます。「国外の大学や大学院に留学する」(14.7％)が2番目に多い回答であることからもうかがえるように留学志向が強い点が特徴と言えます。

また、留学生の「職業をえらぶ時に大切にする(した)こと」の回答をみると[図表IX-5]、学部生全体では第7位(14.3％)に過ぎなかった「将来発展する見込みがある」という回答が29.5％と約3割に達し、「安定した生活が保証されている」と同率で第4位に入っています。職業の将来性を重視する留学生の傾向がうかがわれます。

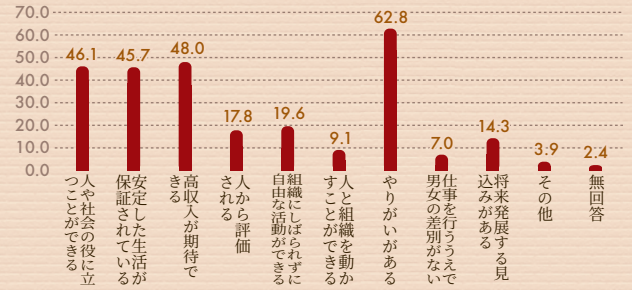
図表IX-1 卒業後の進路希望 学部生全体



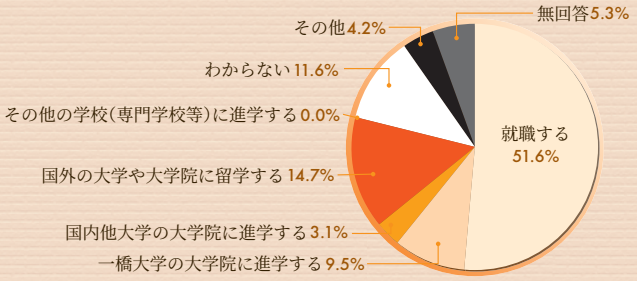
図表IX-2 どのような職業につきたいか 学部生全体



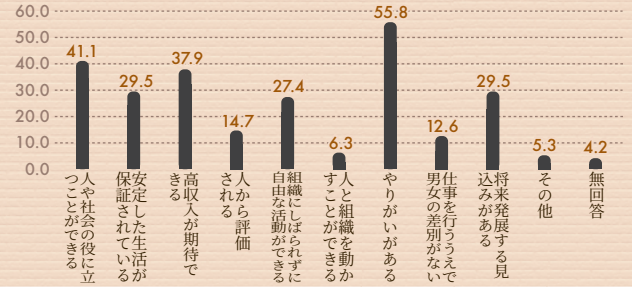
図表IX-3 職業を選ぶ時に大切にする(した)こと 学部生全体



図表IX-4 卒業後の進路希望 学部留学生のみ



図表IX-5 職業を選ぶ時に大切にする(した)こと 学部留学生のみ



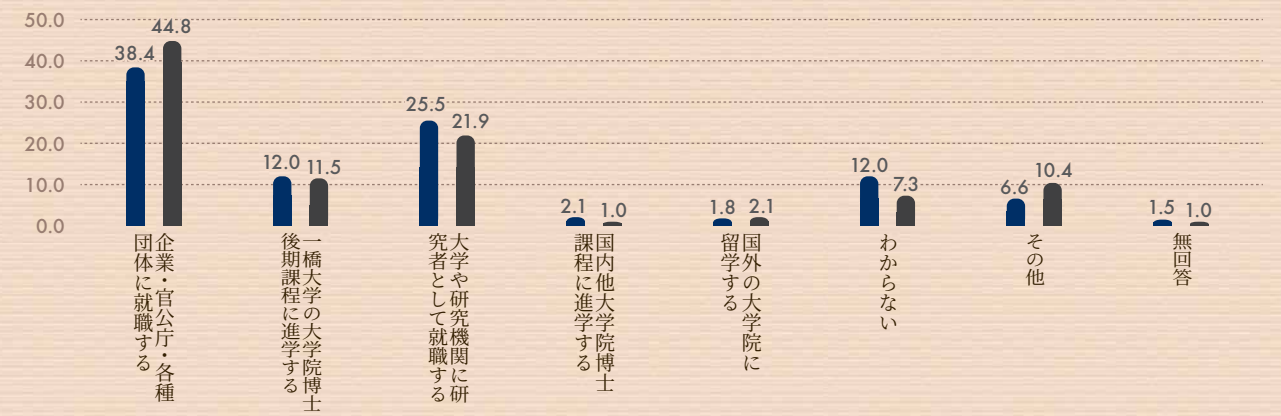
X 進路計画について

大学院生

大学院生対象調査では、進路希望について、「課程修了後どのような進路をとりたいか」、「どのような職業につきたいか」、「進路希望を決めた時期」、「現在の進路を希望するようになった理由」、「大学院に進学後、進路に迷いが生じたことはあるか」の５つの設問への回答を求めています。

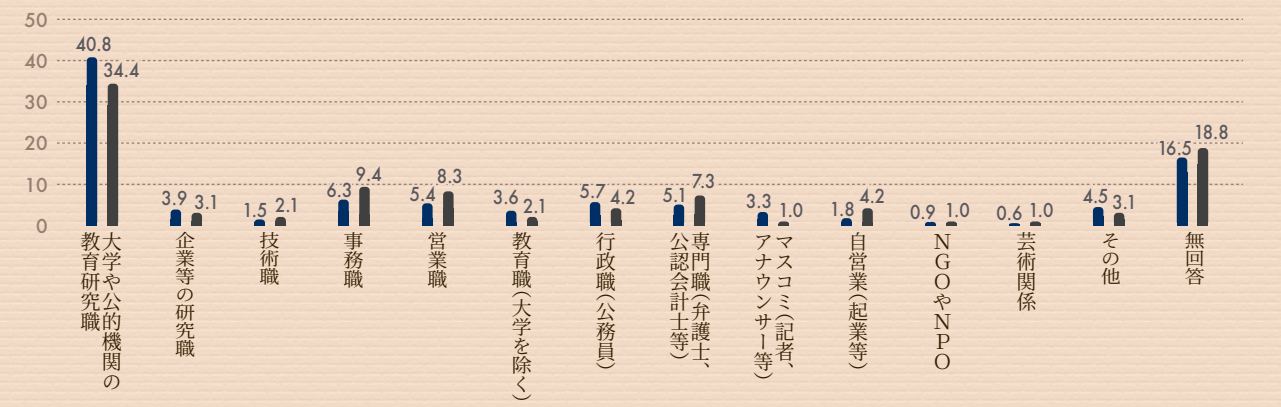
「課程修了後の進路」についての回答で、大学院生全体と留学生のみを比較すると、どちらももっとも多いのは「①企業・官公庁・各種団体に就職する」で、大学院生全体では38.4％、留学生では44.8％を占めています。2番目に多いのは、「③大学や研究機関に研究者として就職する」（大学院生全体で25.5％、留学生のみを取り出すと21.9％）です。このように希望する進路に関する全体的な傾向は留学生とそれ以外で顕著な違いはみられないと言えるでしょう［図表Ｘ-1］。

図表Ｘ-1　課程終了後の進路　大学院生全体　大学院留学生のみ



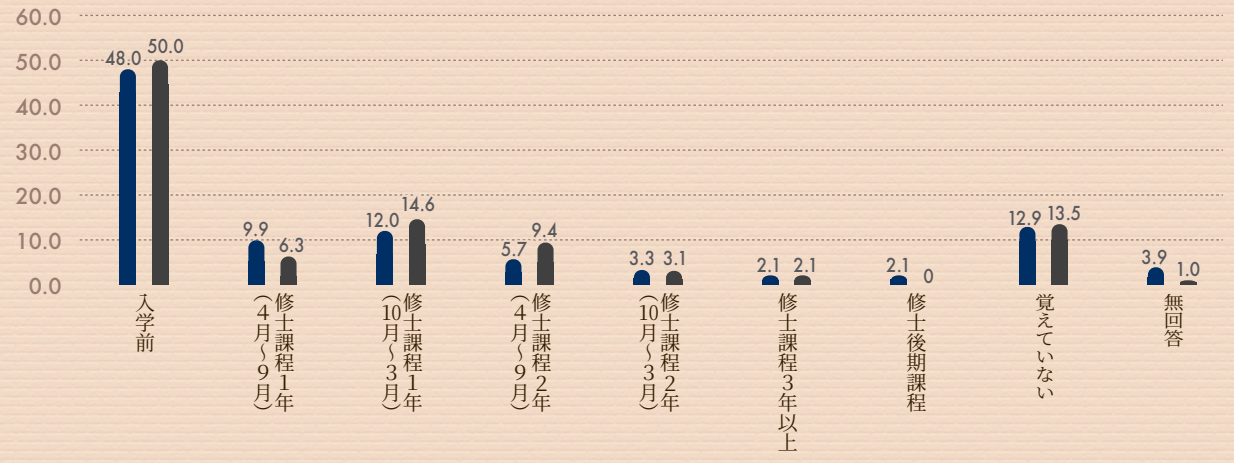
「どのような職業につきたいか」の結果は［図表Ｘ-2］の通りです。回答は大学院生全体でも留学生のみでも「大学や公的機関の教育研究職」が第１位で、「事務職」が第２位です。なお、第１位と第２位の差はかなり開いていますが、第２位と第３位以降の項目の差は大きくありません。

図表Ｘ-2　どのような職業につきたいか　大学院生全体　大学院留学生のみ



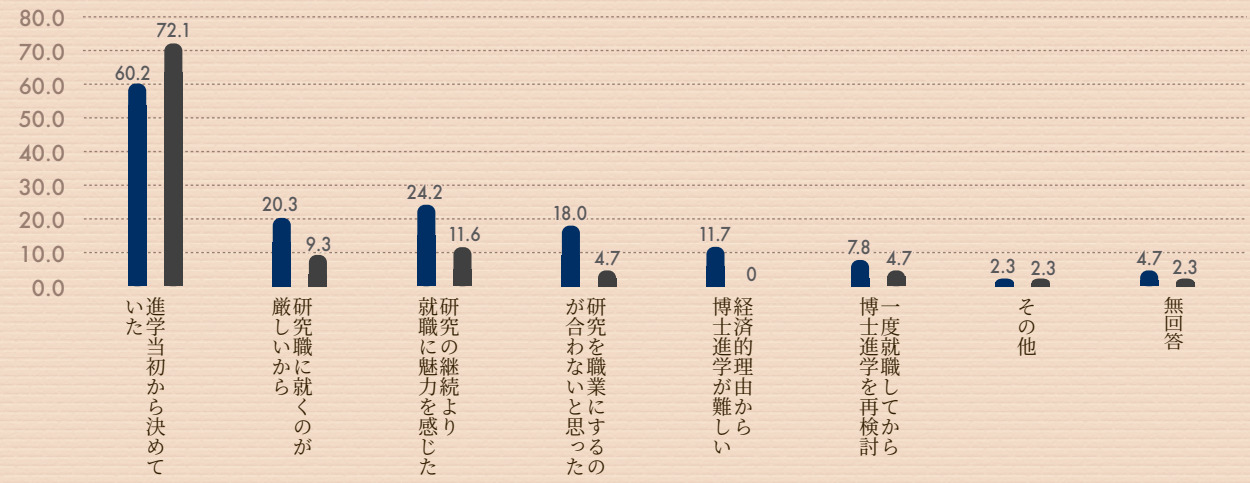
「進路希望を決めた時期」の回答結果をみると、「入学前」という回答が大学院生全体で48.0％、留学生のみでは50.0％とどちらも群を抜いて第１位です[図表Ｘ-3]。

図表Ｘ-3　進路希望を決めた時期　大学院生全体　大学院留学生のみ



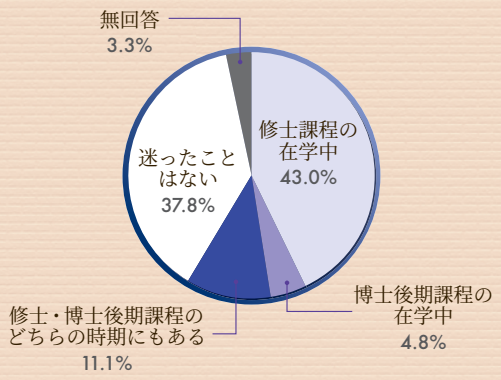
今回の調査では「課程修了後どのような進路をとりたいか」[図表Ｘ-1：前掲]で「①企業・官公庁・各種団体に就職する」と回答した人に対し、現在の進路を希望するようになった理由を尋ねています[図表Ｘ-4]。大学院生全体では「①進学当初から決めていた」が60.2％ともっと多いのですが、その一方で、「③研究の継続より就職に魅力を感じた」(24.2％)、「②研究職に就くのが厳しいから」(20.3％)、「④研究を職業にするのが合わないと思った」(18.0％)といった理由もそれぞれ２割程度あり、研究職から「企業・官公庁・各種団体」に進路希望を変更したケースも少なくないことが分かります。これに対して、留学生のみでは、「①進学当初から決めていた」に72.1％が集中し、「③研究の継続より就職に魅力を感じた」(11.6％)、「②研究職に就くのが厳しいから」(9.3％)、「④研究を職業にするのが合わないと思った」(4.7％)などの回答の比率は小さくなっています。

図表Ｘ-4　課程修了後にどのような進路をとりたいか　大学院生全体　大学院留学生のみ

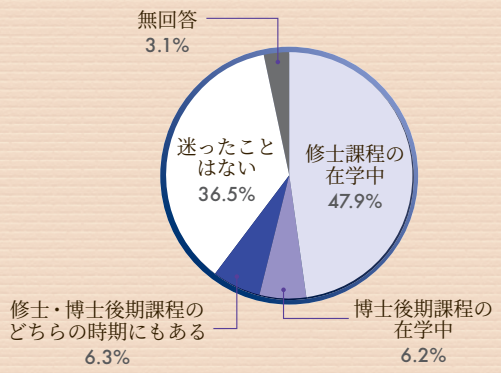


大学院生全員を対象に尋ねた「大学院に進学後、進路に迷いが生じたことはあるか」の回答結果をみると「①修士課程の在学中」という回答が大学院生全体（43.0％）でも、留学生（47.9％）でももっとも多く、ついで「④迷ったことはない」という回答が大学院生全体（37.8％）でも、留学生（36.5％）でも２番目に多くなっています[図表Ｘ-5、図表Ｘ-6]。

図表Ｘ-5　大学院に進学後、進路に迷いが生じたこと　大学院生全体



図表Ｘ-6　大学院に進学後、進路に迷いが生じたこと　大学院留学生のみ



編集後記

今回の学生生活調査には、学部生2,223名、大学院生333名もの学生が協力してくれました。学部生からの回答数は前回を大きく上回りました。そのおかげで、日常生活の様子や授業やゼミへの姿勢、進路計画についての考え方など、さまざまな側面から、一橋大学の学生の全体としての傾向を把握することができました。また、大学が行っている各種の支援制度の利用や認知に関する貴重な情報も集まり、自由記述欄では学務制度に関して多くの建設的な意見が寄せられました。今回の生活調査が、一橋大学の学部生・大学院生のよりよいキャンパスライフのために活かされることを願っています。そして、本学が提供している学生支援や充実した学びのための諸制度について、この調査を契機により多くの学生の皆さんが関心を寄せ、必要に応じて有効活用してもらえるようになれば嬉しい限りです。

一橋大学
HITOTSUBASHI UNIVERSITY

平成 26 年度
よりよい一橋ライフのために～学生生活調査とその分析～
平成27年3月発行

編集　一橋大学学生委員会
委 員 長　沼上　　幹（理事 教育・学生担当副学長）
副委員長　南　　裕子（役員補佐 学生担当）
委　　員　鷲田　祐一（商学部・商学研究科）
竹内　　幹（経済学部・経済学研究科）
相澤美智子（法学部・法学研究科）
山田　哲也（社会学部・社会学研究科）
星名　宏修（言語社会研究科）
柳田　直美（国際教育センター）
林　　大樹（学生支援センター・キャリア支援室）
中島　正雄（学生支援センター・学生相談室）

発行　一橋大学学務部学生支援課
〒186-8601　国立市中２－１